
流星のロックマン 連鎖する運命

冬の結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 連鎖する運命

【Nコード】

N4263W

【作者名】

冬の結晶

【あらすじ】

メテオGの事件から数カ月後、スバル達は6年生になり平穏な生活を送っていた。そんな中FM星では、アンドロメダの鍵の設計図を盗み再び地球侵略を企むFM星人達が、地球に向かってきていた。陰で糸を引く者達から、スバル達は地球を守ることが出来るだろうか？

ブローグ

- ??? -

カタカタ・・・暗闇の中キーボードを打つ音が部屋に響く。影が画面と向き合いキーボードを叩いている。音は休むことなく続いていた。そんな中ドアが開き暗闇の中に光が差し込んだ。

「こんな遅くまで計画の確認？体調崩すよ？」

ドアから入ってきた人物は、キーボードを叩いている影に言った。

「・・・計画の最終確認だ。そっちこそこんな遅くまで起きていたら体調崩すぞ。」

影はそう言いながら手を止めた。

「最終確認って『核^{コア}』を集めるだけじゃなかった？」

「そうだけど・・・失敗は出来ないからな。それより例の件うまくいったか？」

「バッチリだよ。うまくいった」

「分かった。俺はもう少し起きとくけど、お前はもう寝ろよ」

ドアから入ってきた人物は、「分かった。無茶はするなよ」というと外に出て行った。

部屋に残った影は、再びキーボードを叩き始めた。

- F M 星 -

現在時間は午前零時。ここに住むF M星人の人々も寝ているように電波体の気配がほとんどない。そんな中F M宮殿では、警報が鳴り響いていた。

「なにことだ」

緑色の電波体が現れた。彼の名前はケフェウス。F M星の王であり、かつて地球侵略を企んだ。しかし、その戦いでスバルと出会い絆の大切さを知った。今は過去の罪を償うために過去に滅ぼしたA M星の復興を手伝っている。

宮殿の扉が開き一人の兵士が入ってきた。

「大変ですケフェウス様。F M星人の数々が、アンドロメダの鍵の設計図を盗み地球に向かっています。」

「何、地球との連絡は？」

「電波がジャミングされていて連絡が出来ません。」

報告を聞くとケフェウスは、宮殿の出入り口へと足を運んだ。

「ケフェウス様どちらへ」

「地球の民達にこのことを伝えに行く。」

「！ダメですケフェウス様。今あなたがFM星を離れては、FM星の民達の信頼をなくしてしまいます。どうかここにいてください。」

「我々も同じ意見ですFM王」

突然後ろから声が聞こえたため反射的にケフェウスは振り向いた。そこには、AM星の三賢者ペガサス・レオ・ドラゴンがいた。兵士は三賢者を見ると一礼をして外に出て行った。

「地球には、すでに我々の使者が向かっています。」

「ですからFM王は、ここを離れずすべきことをしてください。」

ケフェウスは、「・・・分かった」といつて承諾した。

「・・・お主達も離れるわけにわいかないのか？」

「はい、AM星の復興が忙しいため我々も離れるわけにはいきません。しかし、大丈夫でしょう。地球には、星河スバル達があります。彼らならやってくれるでしょう。」

ケフェウスは「そうだな」といった。しかし、そこにいた四体の電波体は嫌な胸騒ぎを感じていた。

プロローグ（後書き）

初投稿のうえ僕は国語能力が欠けているため、いろいろおかしなところがあると思いますが、これからがんばっていこうと思います。
感想・アドバイス等お願いします

いつもの朝

・コダマタウン・

現在AM8：10 ある青い屋根の家で、叫び声が聞こえる。

「いい加減起きろー！ー！！」

「あゝもう、うるさいよ。ウォーロック」

「何がうるさいだ。今何時だと思ってやがる」

「んゝえつと・・・！！」

布団の中にいた少年は、近くにあった時計を見るなり飛び起きた。

「8時過ぎてるよ！ウォーロック何で起こしてくれなかったの！
？遅刻するー！」

「俺がお前を起こすために何回叫んだと思ってるんだよ！！」

少年は学校の準備をすると部屋を出て階段を降りて行つた。

彼の名前は星河スバル。彼はロックマンになって、『FM星人の地球侵略』『ムー大陸の事件』『メテオGの事件』の三つの大きな事件を解決し地球を救った英雄である。他にも平行世界でアポロンフレ임とブラックホールサーバーでシリウスと戦っている。

朝スバルを起こそうとしたのが、スバルの相棒であるウォーロック。彼は元AM星人だったが、今はスバルのウィザードとして生活している。スバルと電波変換することで、シューティングスターロツクマンになれる。

「おはよ、母さん」

「おはよ、スバル。朝食は机の上にあるから速く食べなさい。ルナちゃんたちたち来てるわよ。」

彼女は星河あかね。スバルの母親で、優しく料理が得意。

「あれ、父さんは？」

「大吾さんならもう仕事に行ったわよ」

星河大吾。スバルの父親で、行方不明だったがメテオGの事件後、ウォーロックと共に地球に戻ってきた。今はWAXAで働いている。

スバルは異常な速さで朝食を食べた。

「ご馳走さま」

その後、荷物を持って玄関に向かった。

「行ってきます」「いつてらっしゃい」の会話を交わすとドアを開け外に飛び出た。

「おっそーい！！今何時だと思っているの!?!」

「ごめんなさい！委員長」

スバルが謝った彼女の名前は白金ルナ。高飛車な面がある。ウィザードはモードで礼儀正しい。

「おっせーぞ。スバル」

「ゴンタ君が言えることではないと思いますよ。」

「うつ・・・」

牛島ゴンタ。単調だが喧嘩には強い。ウィザードは元FM星人のオックス。電波変換でオックスファイアになれる。

メガネを掛けた背の低い彼は、最小院キザマロ。ウィザードは計算が得意なペディア。

「とにかく、時間がないわ。走るわよ」

ルナを先頭に四人は学校へ走り出した。

いつもの朝（後書き）

感想・アドバイス等待着てます。

転校生（前書き）

「プロローグ」と「いつもの朝」を編集しました。
注意、アドバイスありがとうございます。

転校生

ーコダマ小学校ー

あれから全力で走った結果時間ギリギリで間に合った。

「ギリギリセーフ。疲れた」

「誰のせいでこうなったのかしら？」

ルナがオーラを放ちながら聞いてきた。

「（ま、まずい・・・ゴンタ、キザマ口助けて！）」

スバルが二人に視線を送るが、とぼつちりをくらわないようにするため二人は視線をはずし授業の準備をしていた。スバルが長い説教を覚悟したとき、教室のドアが開き先生が「ホームルームを始めるぞ」みんな席につけ」といいながら入ってきた。

ルナは「次からは速く起きるように」といって席に着いた。スバルは「（助かった）」意外何も思っていなかった。

「よし、みんな席に着いたな。今日は知っている人もいると思うが転校生が来るぞ。」

周りを見ると確かに席が四つ空いていた。周囲が騒がしくなり「どんな子が来るんだろ」「楽しみだね」などのお決まりの会話が聞こえてきた。

「まあ、みんながよく知っている人たちだからすぐに仲良く出来るだろう。じゃ、入ってきてくれ」

先生がそういうと教室のドアが開き三人の転校生が入ってきた。転校生を見るなりクラスのみんなは、言葉を失った。なぜならその転校生は……

「双葉ツカサです。みんな久しぶり、のほうが合ってるのかな？」

「ジャックだ。元気にしてたか」

「ベイサイドシティーから転校してきた響ミソラです。よろしくをお願いします。で、いいのかな？」

双葉ツカサ。幼い頃、親に捨てられたため、親への憎しみが大きくなった。その結果もう一つの人格ヒカルが生まれた。FM星人侵略のとき、FM王の右腕ジェミニと電波変換してジェミニスパークになりFM星の最終兵器アンドロメダを復活させた。しかし、スバルに阻止され、スバルと接することで親への憎しみが薄れていきヒカルと向き合って生きていくため、和解の旅に出ていた。

ジャック。ディーラーの元幹部で、キングのメテオG計画を手伝っていたが、その計画を利用しメテオGを地球にぶつけようとするが、スバルに止められた。今は罪を償うためにWAXAで働いている。

響ミソラ。幼い頃父親を事故で、母親を病気で亡くしつらい日常を送っていた。しかし、スバルと出会うことでつらかった日常が変わっていった。国民的歌手で、スバルの始めてのブラザー。ウィザードは元FM星人のハープで、電波変換することでハープノートに

なれる。

「あと一人いるんだが、用事ができたらしくてあえるのは明日になるな。さあて、三人はこの席がいいかな？」

先生が言ったとたん教室の男子（スバル以外）が人気アイドルのミソラを自分の隣にしようとあちこちから「ミソラちゃんは僕の隣に」と言う声が聞こえ始めた。

「ツカサ君、ジャックここ空いてるけど、どう？」

男子生徒がミソラを自分の隣にしようとがんばっている中、スバルはツカサとジャックに声を掛けた。そんな中、ミソラが希望を言った。

「先生、私スバル君の隣がいいです。」

「うーん、星河はいいか？」

「え、いいですけど・・・」

その瞬間クラスの男子（ツカサ、ジャック以外）から、殺気のもった視線を向けられた。ルナはそれに加えて不気味（嫉妬？）なオーラを放っていた。

「（・・・なんかみんなからの視線が痛いし、委員長がすごい怖いんだけど）」

そんな空気を気にせずミソラがスバルの隣の席に来ていた。

「これからよろしくね。スバル君」

「う、うん。こっちこそよろしくね、ミソラちゃん」

スバルはさらに殺気のこもった視線を向けられていた。

「響の席は決まったな。ツカサとジャックはどこがいいか？」

「僕はどこでもいいです。」

「俺もどこでもいいぜ」

先生が二人の席を決めた後、今日の予定を言う。「よし、これでホームルーム終了。みんな授業の準備しとけよ」と言うと言室から出て行った。授業の準備が終わるとスバル、ミソラ、ルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックの七人の雑談が始まった。

「ツカサ君帰ってきてたんだね」

「うん、一週間ぐらい前に戻ってきたかな」

「それにしても驚きましたよ。転校生がツカサ君にジャック君、ミソラちゃんだったとわ」

「本当よ、三人とも何の連絡もなしに来るんだから」

「それよりさ、ジャックやミソラちゃんは何でコダマ小に転校して来たんだ？」

「俺は暁に『お前はまだ小学生だから学校に行け』って言われて、強制的にこさされた。」

「私は勉強を長い間ほとんどやってなかったから、そろそろ勉強しないといけないかなと思って転校してきたんだよ。」

「あれ、ミソラちゃんってベイサイドシティの学校に通ってたんだから無理に転校しなくてもよかったんじゃないの？」

「そういえばそうね、何か理由があるの？ミソラちゃん」

「え、ええ〜と・・・スバル君やみんながいるからだよ。」

ミソラは答える間少しスバルを見た。それにきずいたツカサはミソラとスバルを見てくすぐすくと小さく笑っていて、ルナは再び不気味なオーラを放っている。他の四人は話に夢中でききしていない。

「（・・・なんか委員長が怖いんだけど、なんかやったかな）」

「でも、学校に行き始めたら仕事がやりずらくなるんじゃないの？」

「ツカサ君の言うとおりなんだよね。だから、次のライブが終わったらしばらくの間仕事を休むつもりなんだ」

「ええ、じゃあミソラちゃん歌手やめちゃうのかよ」

「しばらくの間って言ったでしょう。」

「じゃあ、みんなでミソラちゃんのライブに行かない？」

スバルの提案にほとんど全員賛成したが・

「俺はいかねえぞ、騒がしいところ嫌いだから」

「だめよ、ミソラちゃんの引退ライブなんだから拒否権ないわよ」

ルナの言葉にいいかえそうとしたが、後がうるさいのでしぶしぶ承諾した。

「ということで、全員行けるそうよ。」

「分かった。全員分のチケット取っとくね」

そんな会話をしているとクラスの男子がスバルを呼んだ。スバルは「（何だろう）」と思いながら行くと、スバルの周りを囲んだ。

「え、な何？」

「お前ミソラちゃんとどういう関係なんだ？」

「え、ブラザーだけど・・・」

「なんだと！詳しく説明してもらおうか、スバル？」

「（な、なんかみんなの目が怖いんだけど・・・）」

助けてもらおうとみんなのほうに視線を送るが、ライブの話に夢中で誰も気がついていない。クラスの男子による尋問（？）が始まろうとしたとき、再び教室のドアが開き先生が「おい、なにしてい

る。授業始めるぞ」と言いながらはいってきた。スバルを囲んでいた男子は悔しそうに席に着いた。

「（た、助かった・・・なんだか今日は良い一日でもあって、ひどい一日だな）」

スバルはそう思いながら席に座り、授業が始まった。

転校生（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

大量発生（前書き）

投稿遅れてすみません。これから気をつけようと思います。では、どうぞ。

大量発生

- 屋上 -

今ここには僕と^{スバル}ウイザードのウォーロックしかない。え？どうしてかだってそれは・・

みんなが昼食を食べ終わると、ミソラがコダマ小に転向してきたことをかぎつけたファンの人でクラスの中がいつぱいになった。ツカサとジャックも「今まで何していたんだ？」などと質問されている。委員長たち三人は教室にきたミソラのファンの対処で忙しいようだ。スバルは教室にいとクラスの男子にいろいろ問い詰められそうなので誰もいないと思われる屋上にいる。

そんな訳で屋上に来たスバルは芝生の生えたところに座って空を見上げていた。

「にしてもツカサ君やジャック、ミソラちゃんが転校して来るなんて驚いたね。」

「俺にとつてはいい迷惑だけだな」

「え、なんで？」

「ハープのやつがいるだろ」

「・・・何でウォーロックは、ハープが苦手なの？」

「前にいろいろあつてな」

「ふん」

スバルはそう言つと話を止めて再び空を見上げた。

「・・・なあ、スバル」

「うん？何、ウォーロック？」

「暇だゝ何か事件とか起きないかなゝ」

「暇ならハープの所に行けば？」

「いや、それは無理。それよりウイルスとかをぶつ倒すほうが良い。」

「えゝ、僕は嫌だよ。戦つたりするの。それに、それに事件なんてそう簡単に起きないよ。」

スバルはウォーロック意見にさらつと答えるとまた空を見上げた。

「・・・事件起きろ」

「え？」

「事件起きろ、何でもいいから事件起きろ・・・」

「ちよつとウォーロック、物騒なこと言わないでよ。それにそん

なこと言っ たって事件が起きるわけが」

そのとき町に爆発音があった。

「お、おいスバルウイルスが大量に出てきたぞ」

「ウォーロックがあんなことを行っ てたからだよ」

「俺のせいにするなよ。それより、速く行かなくていいのか？」

「もう、行くよウォーロック。電波変換」

そういうとスバルはロックマンの姿になり、ウェーブロードに乗ってウイルスがいるところに向かっていった。

・ウェーブロードー

「スバル君」

スバルがウェーブロードで移動していると後ろから声を掛けられた。そこには、ハーブノートがいた。

「ミソラちゃん、どうして」

「教室でみんなと話していると、外から爆発音がきこえてハーブがウイルスが出たって言っ たから急いできたの。それから・・・」

「スバル（君）」

声がした方を見るとジェミニスパークとジャックコーヴァスも来ていた。

「ツカサ君、ジャックそれにヒカルも、三人ともどうして電波変換ができるの？」

「その話はまた後で、それより」

「おい何話してんだ。さっさと行ってかたずけるぞ」

「う、うん。行こう。」

五人は、ウェーブロードを使い現地に移動し始めた。

・コダマ公園・

「うわ」

「な、なにこれ」

四人の目の前には、百体をゆうに超えるウイルスの大群が暴れていた。

「とりあずさっさと終わらせようぜ」

「久し振りに暴れるぜ」

「ヒカル、ほどほどにね」

五人は手分けしてウィルスを倒し始めた。

「ブレイクサーベル」

「パルスソング」

「フェザーシッケル」

「エレキソード」

「ロケットナックル」

五人の攻撃によりウィルスの大群は減る・・はずだった。

「ねえ、もうずいぶんウィルスを倒したよね。」

「うん、でも」

「数が減ってないね」

「逆に増えてきてるな」

「ねえ、それになんかウィルスの動きが速くなってきてない」

「僕もミソラちゃんの言っているとおりだと思う」

そう、ウィルスの動きが速くなり当たっていた攻撃が少しずつ当たらなくなってきた。

「！ミソラ後ろ」

ミソラが目の前ウィルス不倒すと残っていたウィルスがミソラを後ろから攻撃しようとしていた。しかし、そのウィルスが突然真つ二つになりデリートされた。

「ミソラ、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよハープ。ありがとうヒカル君」

「口を動かす暇があつたら手を動かせ」

「いくらなんでも数が多すぎる」

このままだと、体力が減っていくスバルたちが不利なのは明らかだ。スバルは広範囲攻撃のバトルチップを使うが、ウィルスたちは一向に減る様子がない。

「！おい、スバル。何か変な周波数があるぞ」

「え、ウォーロック場所は？」

「目の前のウィルスの中だ」

「分かった。ソードファイター」

バトルチップを使いウィルス不倒すが、残ったウィルスが邪魔をしてスバルの行く手を遮っている。

「どうしよう、これじゃ何があるのかが分からない」

「スバル、少し離れてろ」

声が聞こえたほうを見るとジャックが空にいて両手からは紫色の炎が出ていた。スバルはジャックのすることが分かると上にあったウェーブロードに移動した。

「ペインヘルフレイム」

すると無数の炎がウォーロックの言った場所にいたウイルスを半分以上燃えた。燃えている炎の中からは奇妙な光を放つ装置が現れた。その装置の周りを中心に焼き払ったウイルスが出現していた。

「あれは！」

「どうやらあの装置を壊さないとこのウイルスは消えてくれないみたいだね。」

「そうみたいだね。行くよツカサ君、インパクトキャノン」

「ロケットナックル」

二人の攻撃は装置にあたり音を立てて壊れた。装置が壊れた瞬間ウイルスたちの動きが始めの速さに戻った。

「すべてあの装置のせいだったってわけか」

「そうみたいだね。けど、もう増えることはない」

「よし、ショックノート」

「ジェミニサンダー」

「ペインヘルフレイム」

「ジャイアントアックス」

スバルたち五人の一斉攻撃でさっきまで減ることのなかったウィルスがほとんど消えていった。残りのウィルスをかたずけるのにそんなに時間は掛からなかった。ウィルスがかたずくとスバルたちは電波変換を解いた。

「やっと終わった」

「さすがに疲れたね」

「俺とツカサがいなかったらお前らやられてたな。」

「そういえば気になってたんだけど、なんで二人は電波変換が出来るの？ジェミニとコヴァスがいらないのに」

「それはね」

スバルの質問にツカサが答えようとしたとき、スバルのハンターが鳴った。

「スバル電話だ」

「分かった。ありがとう、ウォーロック」

スバルはウォーロックにお礼を言うと「誰だろう」と思いながら

ハンターを操作してエアディスプレイを出した。そこにいた人物は・

「ひさしぶりね。スバルちゃん」

「ヨイリー博士」

ヨイリー博士。WAXAの科学者。メテオGの一件で、スバルに力を貸してくれた人だ。

「あ、おひさしぶりです。ヨイリー博士」

「ひさしぶりね、博士」

「あら、ミソラちゃんにハープちゃんひさしぶり。二人とも元気にしてた？」

「はい、元気にしてます」

「そうよかったわ」

「ところで博士、何かあったんですか？」

「ええ、ちよつとそつちで妙な周波数を感知してね。そつちで何か起きてない？」

「ついさっきまでウイルスが大量に発生していました。」

「もう、俺たちが倒したけどな」

「そう、そのことでちょっと話があるから、そうね、学校が終わったらWAXAに来られる?」

「あ、学校があつたの忘れてた。」

「あ、私も」

「じゃあ、まず学校に戻って、話はWAXAでつてことになるね」

「そうだね。学校が終わったらWAXAに行かせてもらいます。」

「ええ、分かったわ」

ヨイリー博士はそう言つと電話を切つた。

「学校に戻ろうぜ」

「うん」

四人は再び電波変換をして学校に向かった。

大量発生（後書き）

戦闘描写を書いて見ました。

アドバイス、感想等よろしくお願いします。

とぼっち

・コダマ小学校・

「よし、ホームルーム終了。気をつけて帰れよ」と言うと先生は教室から出て行った。

それからヨイリー博士と話し終わり、スバル達が学校に戻ると六時間目の授業が始まっていた。なぜいなかったのかと理由を聞かれて素直に「電波変換してウイルスを倒していました」なんて言えるわけがないため、「保健室に行っていました」などと適当な理由を言っ

って授業に参加した。

「で、スバル君たちは、私たちに何も言わずに戦いに行っちゃったことね」

「はい、そうです」

今は教室でさっきのウイルス戦のことをルナ、ゴンタ、キザマロに説明していた。

「それで、今からWAXAに行くの？」

「うん、ヨイリー博士に学校が終わったら行くって言うてあるから」

「分かったわ。ゴンタ、キザマロ、私たちもWAXAに行くわよ」

「え、委員長たちも来るの？」

「当たり前でしょう。それにゴンタだって電波変換できるんだから私たちも話しに参加させてもらうわよ」

「そうですよスバル君。僕たちもついていきますよ。そうですね、ゴンタ君」

「え、ああ、そうだとスバル」

ゴンタは、何か考え事をしていたようで、キザマロに声を掛けられたとき少し驚いていた。

「ねえ、スバル君。速く学校を出ないと出られなくなるよ」

「？何で、ツカサ君」

「スバル、あれをみてください」

ジャックが外を指したので見てみると、そこには大勢の人が校門の前にいた。

「・・・なんなの、あれ」

「多分ミソラちゃんのファンの人たちじゃないの」

「ミソラちゃんってすごいね」

「そんなこと言ってる場合ですか、あれじゃWAXAまで行くの

に時間が掛かりますよ」

「あそこにいる人たちは、ミソラのファンなんだろ」

「多分そうだろうね、それがどうかしたのジャック」

「それなら、ミソラが電波変換してWAXAに行けばいいんじゃないの？」

「確かにそうね、それでいいかしらミソラちゃん」

「うーん、それだったらスバル君も一緒に行こうよ」

「ちょっと待ちなさい。何でスバル君もなのよ」

「だって、みんなは一緒に行って私だけ一人で行くのって嫌なんだもん」

「僕は別にいいけど」

「本当？スバル君。じゃあ速く行こう」

そういうとミソラはスバルを引っ張って教室を出て行った。そのさい、ミソラと一緒にいるスバルを目撃した男性陣が「スバル、何してやがる」などと叫びながら二人の後を追っていった。

「ミソラちゃん教室出るの速かったな」

「スバル君逃げられますかね」

「スバル君も大変だね」

「なあ、委員長のやろぅがマジで怖いんだが、何とかしてくれないか？」

ジャックの隣には話しかけただけで怒りそうなルナがいた。

「うゝん、多分無理。ウェーブライナーに遅るといけないから先に駅行っておくね。」

ツカサは笑顔で言うつと教室を出て行つた。残された三人はルナに声を掛けるが「何？」と恐ろしい目で見られたが、「駅に行きますよ」というとツカサの後を追つていった。ルナは、自分が置いていかれたことにきずきさらに機嫌が悪くなっていた。

ー ウェーブロード ー

「はあゝ疲れた」

「大丈夫？スバル君」

教室を出た後スバル達を追いかけてきた男性陣たちから逃げるため、全速力で走り何とか逃げ切った。今は電波変換してウェーブロードにいる。

「それにしてもすごい人数だったね。スバル君って人気者なんだね」

「いや、僕じゃなくてミソラちゃんだと思うよ」

ミソラはスバルの言った事が聞こえてないようでウェーブロードのうえを歩いている。

「どうしたのスバル君。おいていくよ」

「あ、まってよミソラちゃん」

スバルはミソラのところまで走っていった。それから少しの間二人はWAXAに向かって歩いた。

「それにしてもこうしてスバル君と二人でいるのって久し振りだね」

「そういえばそうだね」

「ああ、なにいつてんだ、俺も・グハ！」

ウォーロックがウイザードオンして出てきたところをハーブが発K.O.にしまった。気を失ったウォーロックをハーブが「ごめんなさいね。このガサツは私が預かっておくわ」と言いながらウォーロックを引きずってどこかに行ってしまった。

「ウォーロック、大丈夫かな？」

「大丈夫なんじゃない、それよりスバル君もう少しゆっくり行かない？」

「え、いいけど」

スバルはそういつとペースを落とした。それから二人はWAXAまで楽しそうに会話をしながら向かった。

「WAXA前」

WAXAの前に青とピンク色の二人の電波体が現れた。二人は電波変換を解き周りを見渡した。

「みんなまだ来てないみたいだね」

「そうみたいだね」

スバルとミソラがルナたちより先についたようだ。（当たり前だが）

「あ、スバル君来たみたいだよ」

ミソラがそういつとウェーブライナーが駅に止まり。ツカサ、ゴンタ、キザマロ、ツカサが出てきた。しかし、ツカサ以外のゴンタ、キザマロ、ジャックはウェーブライナーから出てくると同時にその場に倒れた。

「！ちよつちよと、どうしたの三人とも」

スバルはそういつとミソラと一緒にツカサ達に近づいた。

「スバル・・・牛丼あるか？」

「スバル君、僕はもうだめです」

「スバル・お前らがいるってことはやつとついたか」

ゴントは、スバルが近づくなり好物の牛丼の事を聞き、キザマロは消えそうな声で一言いい、ジャックは何とか立ち上がった。

「ねえ、ツカサ君なにがあつたの？」

ミソラが四人の中で一番大丈夫そうなツカサに聞いた。ツカサはウェーブライナーの方を見た。それにつられてスバルとミソラを見ると、ルナがウィルスの大群が脅えて逃げだすんじゃないかという不気味なオーラを放っていて、何か言っていた。

「委員長になにかあつたの」

スバルはルナに聞こえないように質問した。

「スバル君とミソラちゃんが教室から出て行ってからああなつたみたいだよ」

ミソラは、なるほどと分かったようにうなずいたが、スバルは何でという顔をしている。

「それで、始めは一人でいろいろ言つてたみたいなんだけど、なぜか僕たちが怒られて」

「委員長に説教されてたつてわけだね」

「そうだぜスバル」

ツカサが説明していたところにある程度回復したジャックが話し

に入ってきた。

「あ、ジャック。もう大丈夫なの」

「俺はな。くそ、あのドリル女め、ウェーブライナーに乗ってからずっと俺達説教されてたんだぞ。」

「それで、キザマロ君とゴンタ君があんなことになったんだね。」

キザマロとゴンタはまだ回復していらしく地面に倒れていた。

「どうする。ヨイリー博士も待っているだろうしそろそろ行っただ方がいいんじゃないの」

「でも、置いていくわけにはいかないよ」

しばらくスバルたちがどうするか考えているとツカサが「・・・ウイザード達に頼めばいいんじゃないの」と言った。

「あ、そうだね。オックス、ペディア、モード委員長たちを頼めるかな？」

「いいぜ」

「了解です」

「ルナちゃんはどうでしょ」

「委員長は落ち着くまでいてあげて」

「分かりました」

「これでいいと思うんだけど」

「いいんじゃないの」

「速く行こうよスバル君」

「そうだね」

ルナ達三人はウィザードにまかせ、スバルたち四人はWAXAの中に入っていた。

とばかり（後書き）

会話文が多いような・

感想・アドバイス等よろしくお願いします

WAXAで

- WAXA -

WAXAの中はサテラポリスの人たちが忙しそうに働いていた。スバルたちが中に入ると、ヨイリー博士が出迎えてくれた。

「すみません。遅くなって」

「いいのよ、スバルちゃん。会議室で話をしましょうか。ついてきて」

スバル達はヨイリー博士についていった。

「ここが会議室よ」

ヨイリー博士はドアの前に止まりドアを開け中に入っていた。スバル達は「失礼します」と言って中に入った。すると中から聞いたことのある声が聞こえた。

「よお、久しぶりだな、スバル」

「あ、暁さん」

暁シドウ。元ディーラの一員だったが、メテオGの事件ではスバルと一緒にキング達と戦った。しかし、戦いの中で大爆発に巻き込まれて行方不明になっていた。

「え、あ、暁さん、生きてたんですね」

「おいミソラ、何だその言い方。まるで俺が死んでいたようじゃないか。・・・まあ、確かに一度死んだけど。」

最後の言葉はスバルたちには聞こえないよう言った。

「でもどうしてですか。あの爆発に巻き込まれたらとても生きて戻れるなんてこと・・・」

「スバル、俺あるとき電波変換してたよな」

「え、はい。してましたけど」

「電波変換した状態だったから爆発に巻き込まれた時データとして電脳の中とかに散らばってたらしいんだ」

「でも、それがどう関係・・・あ」

「?どうしたのスバル君」

「ほら、委員長がジョーカーにやられたとき、散らばったデータを集めて再構築したじゃない」

「そう、それで私とジャック、サテラポリスの人たちでシドウのデータを集めて再構築したのよ」

「クインティア先生」

クインティア。ジャックの姉で、元ディーラの幹部。ジャックと

一緒にメテオGを地球にぶつけようとしたがスバルに止められた。
そのさい、ウィザードだったヴァルゴは、コーヴァスとともにブラ
イにデリートされた。

「久し振りね。あと、もう先生じゃないわ」

「はい。でも、暁さんアシッドは・・・」

「ああ、アシッドもちゃんというぞ。ウィザードオン」

暁が言つと白を中心としたウィザードが出てきた。

「お久し振りです。みなさん」

「アシッド！久し振り」

「暁さん。もしかしてアシッドも再構築したんですか？」

「お、鋭いなミソラ。そのとおりだよ」

「そうなんですか・・・あ、もしかしてツカサ君やジャックが電
波変換出来た訳って」

「気がついた。僕のハンターからジェミニのデータが見つかって、
スバル君の手助けが出来ると思って再構築してもらったんだ。」

「俺はコーヴァスがいれば戦うことが出来るからな」

「へえ、え、コーヴァスが再構築できたってことはヴァルゴも」

「ええ、再構築してもらったわ」

「さて、そろそろ本題にはいつていいかしら」

「あ、すみませんヨイリー博士」

スバル達は指定された席に座ると周りの雰囲気が変わった。

「じゃあ、まずウイルスを出していたと思われる装置のことだけ
ど・・・」

「え、何で装置のことを知ってるんですか？まだ報告してないの
に」

するとシドウが「スバルたちが話している間にジャックが装置を
回収してメールで報告してくれたんだ」といった。

「話を戻すわね。その装置についてなんだけど作りが複雑でまだ
分からないけど、その装置の中にこんなものが在ったの。」

ヨイリー博士はそう言うのと白くて丸いものを見せた。スバル達は
順番にその丸いものを見た。

「これって石ですよね」

「ああ、ツカサの言ったとおり石なんだが、これただの石じゃないんだ」

シドウは見終わったスバルたちから石を預かり言った。

「どうゆうことだ？」

「この石は少しだけ周波数を持つてるのよ。」

「え、石が周波数を持つことってあるんですか？」

「時々あるんだよ。電波を沢山浴びることで周波数を持つのが」

「シドウちゃんの言ったとおりの石ならたいしたことないんだけど、この石は特別のようですね。」

ヨイリー博士が言うといつの間にかクインティアがウイルスを連れて来ていた。

「姉ちゃん、そのウイルスは？」

「まあ見てなさい。ヴァルゴ」

「はあゝい。ティアやつちゃっていいのね？」

「ええ」

「りょゝかゝい。ゴッドレイン」

ハンターから出てきたヴァルゴが杖を振るとウイルスの上に雨が降り出し、ウイルスがデリートされた。シドウが持っていた石をデリートされたウイルスの近くに置いた。しばらくすると突然、石がしかりだしデリートされたウイルスが現れた。クインティアは再び現れたウイルスを持って会議室から出て行った。シドウは石を拾い机の上に置いた。

「今、見たとおり、この石にはデータを自動で再構築することが出来るみたいなのよ」

「やっぱりウイルスが減らなかったのはその石が関わってたんですね。」

スバルが言うとシドウが答えた。

「そうゆうことになるな。だが、この石は力が弱いようだな。短時間で何体ものウイルスを再構築するのは無理なはずなんだ」

「それを装置を使って強引に力を底上げしたってところね。」

「そうだったんですか」

スバルが答えると沈黙がおとずれた。その沈黙を始めに破ったのはミソラだった。

「あゝ、その石っていったい何なんですか」

「それがな、分からないんだ」

ミソラの質問にシドウが答えた。

「え、分からないんですか？」

「そうなのよ。地球でできたとは考えにくいし、ムーの物でもないのよ」

スバルの質問にヨイリー博士が答えると、ツカサが「このものが分からない石か・」とささやいた。
シドウが石を持ち言った。

「だが、この石があつた装置を作つたやつがいるはずだ」

「・・・また戦いが始まるんですか」

スバルが言った言葉に会議室にいたほとんどの人たちが息を飲んだ。

「・・・たぶんな。敵が分からないため手の打ちようがないが、一応頭に入れておいてくれ」

「分かりました」

「よし、今回の話し合いはここまでだ。帰っていいぞ。あ、ジャックは上に行つてティアを手伝つてくれ」

ジャックは「何で俺が・・・」とぼやきながら部屋を後にした。ジャックが出て行くとヨイリー博士がスバルに声を掛けた。

「あ、それとスバルちゃん、あなたに渡す物があるのよ」

「何ですか？」

「ハイ、これ。預かつてた『エースノジョーカPGM』よ。ノイズチェンジはできないけど、ファイナライズはできるようにしてあるから」

「あ、ありがとうございます」

「いいのよ。けど、メテオGがあるわけじゃないから不完全で前のような力を出せないから気をつけてね。じゃあ、気おつけて帰るのよ。」

スバル達は「はい」といって会議室から出て行った。

「・・・あのPGM、渡してよかったんですか？」

「スバルちゃんなら大丈夫よ。さあ、シドウちゃんは私と一緒に研究室に来て石があった装置の解析を手伝ってちょうだい」

「え？今からですか」

「当たり前でしょ。さあ行くわよ。」

「はあゝまた夜勤か・・・」

シドウはそう言いながら研究室に向かった。

拾い物と

- W A X A 外 -

スバルたちはシドウたちの話が終わるとWAXAから外に出てルナたちがいるウェーブライナーに向かった。

「それにしてもずるいよ。スバル君ばかりPGMとか貰って強くなって」

「いや、ミソラちゃんも十分強いと思うけど」

「それでも・・・肝心なときには一緒に戦うことができない・・・」

ミソラは思いつめたような顔をしてうつむいた。

「・・・だったら、ヨイリー博士に頼んでみたら？もしかしたらPGM作ってくれるかもしれないよ」

「・・・そうだね、そうしてみるよ」

ミソラはスバルの言った言葉で少し元気が出たようであつむいていた顔を上げた。それからスバルとミソラは楽しそうに話し始めた。ツカサはそんな二人を少し離れたところで見ていた。そうしているとき、遠くから三人が近づくのが見えた。

「おい、スバル」

「あ、ゴンタ」

ルナ、ゴンタ、キザマロの三人がスバルたちに近づいてきた。WAXAについたときのルナの悪かった機嫌は元に戻っているようだった。

「ゴンタ、キザマロ、委員長の機嫌が直ってるようなんだけど何かあったの？」

スバルはルナに聞こえないようにゴンタとキザマロに聞いた。

「モードとペディアたちががんばってくれたそうです」

「本当に大変だったんだぞ」

キザマロは理由をいいゴンタは恨むぞという顔をしている。そんなルナが聞いてきた。

「ちょっとスバル君話し合いは終わったの」

「うん、もう終わったよ」

「せっかく今から行こうとしていたのに・・・まあいいわ、ウェーブライナーに遅れるから話はそこで」

スバルたちは駅に向かって走り出した。

- ウェーブライナー -

今はスバル、ミソラ、ツカサの三人でルナたちにWAXAでの出

来事を説明していた。また戦いが始まるかもしれないことも一応話した。

「・・・そう、また戦いが始まるのね」

「大丈夫なんですか？」

「多分ね。もし始まったら、今までと同じようにできることを精一杯するだけだよ」

「がんばってください。僕はスバル君たちを応援しています」

「ありがとう、キザマロ」

キザマロはスバルと話をしているが、ルナは心配している顔をしながら、ゴンタは何か考え事をしている。そんな時ウェーブライナーに放送が掛かった。

『次はコダマタウン。お降りの方は忘れ物がないように・・・』

「あ、コダマタウンに着いたみたいだよ。」

ツカサが言うとミソラが言った。

「私はベイサイドシティーだから、また明日」

「そうだったね。じゃ、また明日学校で」

「うん、また明日みんな」

ミソラが手を振ったのでスバルは手を振り返してウェーブライナーを出た。それからしばらくの間スバル達は夕日に染まる町を歩いた。分かれ道来るとツカサは「僕はこっちだから、また明日みんな」といつてスバルたちと別れた。それからルナ達と別れてスバルも家に帰った。

- スバルの家 -

「ただいま」

「お帰り、スバル」

スバルは玄関に入るとあかねがエプロンの姿で迎えた。

「今日はやけに遅かったわね。何かあったの？」

「ちょっと、WAXAに呼び出されてね。後で話すよ」

「分かったわ。大吾さんは夜勤で今日は帰らないそうよ。」

「え？今日もなの？」

「ええ、なんだか一週間前からFM星だっけ？そことの連絡がでないそうなのよ。」

「そうなの？」

「らしいわよ、そのために働いているそうよ」

そう言つとあかねは台所に向かった。

「なんかあつたのか」

「うわ！驚いた。ウォーロックいつから戻つてたの。」

「ついさっきだ。畜生ハーブのやろつ。いきなり気絶させやがつて。ブツブツ……」

ウォーロックが一人でいろいろ言い始めたので、スバルはウォーロックを置いてリビングに向かった。机にはカレーがあつた。

「わあ、今日はカレーなんだ」

「沢山あるわよ」

「いただきます」

スバルはカレーを食べ始めた。あかねも椅子に座つてカレーを食べ始めた。

「そういえば今日学校に転校生が来たんだ」

「へえ、どんな人？」

「それがね、ツカサ君にジャック、それにミソラちゃんだったんだよ」

「え、ミソラちゃんが転校して来たの」

「うん、本当みんな何の連絡もなしに来るんだから驚いたよ」

あかねは「だからミソラちゃん頼んできたのね」と言った。

「?どうしたの」

「いや、何もないわ。それより、WAXAで何の話をしたの」

「ええと」

スバルは暁が生きていること、昼にウイルスの大量発生があったこと、また戦いが始まるかもしれないことを話した。

「そう、あまり無茶しないのよ。」

「うん、分かってるよ。御馳走様」

スバルはそう言うと自分の部屋に行った。

スバルは部屋に入ると近くにあった分厚い本を取り読み始めた。
ウォーロックは何もすることがないようでハンターの中で寝ている。

- 展望台 -

周りが暗闇に染まっている中、突然空間に赤い光があたりを照らした。その光が収まると紫色の石一つ地面に落ちた。

- スバルの家 -

静かになった部屋の中で、さっきまで寝ていたウォーロックがハ
ンターから飛び出てきた。

「おい、スバル」

スバルは本を読みながら「なに、ウォーロック」聞いた。

「ちょっと、展望台に行かねえか」

「・・・明日は雨でも降るのかな？」

「何だこのやろう」

「だって今までウォーロックが自分から展望台に行こうって言っ
たことなかったんだよ」

「確かにそうだがよ。・・・少し妙な周波数を感じてな」

「分かった。行ってみよう」

スバルは準備をすると部屋を出て行った。

「あら、スバル。展望台に行くの」

「うん、ちょっと遅くなるかもしれないから」

「分かったわ。いってらっしゃい」

「いつてきます」

スバルはそう言うと展望台に向かった。

・展望台・

「・・・何もないね」

「おかしいな。さっきは確かに感じたんだが・・・」

スバルは今展望台に来てウォーロックの感じた周波数を探している。

「あれ？ねえ、ウォーロック。これって何だろう」

スバルは落ちていた紫色の石を見つけて拾った。

「その石からはなにを感じねえぞ。それがどうした」

「いや。ただ、昨日ここに来ただけど、そのときはこんな石なかったから」

「そうか。・・・どうやらなにも無いようだな」

「うん。ウォーロックの勘違いだったのかな？」

スバルは辺りを見回しながら言った。

「確かにあの時は感じたんだがな。まあいつか。とっとと家に帰ろっぜ」

「ちょっと待ってよ。せっかく来たんだからもう少しここにいようよ」

ウォーロックはいやな予感を感じながらスバルに「何だと？」と聞いた。しかし、スバルはウォーロックが言ったときにはもう星を見ていた。ウォーロックはしばらくの間「おい。」「スバル」といったがまったく聞こえてないようで返事もしない。ウォーロックは諦めたように静かになった。

展望台の近くである電波体が話してるようだ。

「本当にスバル君があのお洛克マンなの？」

「ええ、だから話のついでに確かめてみたらどうですかとさっきから言っているでしょう。」

「あゝもう、分かったわよ。行くわよ、ユニコーン」

「了解」

電波体たちはスバルがいる場所へ向かって行った。

「！おいスバル。星を見る時間は終わりだ。」

「え、何で？」

スバルは体を起こすと前から電波体が来ているのが見えた。電波

体の周りには青い球体が現れていた。

「フリースボール」

「っち！」

ウォーロックは体を起こして身動きが取れないスバルを突き飛ばした。青い球体が飛んできてスバルがいたところに着弾し、氷付けになっていた。スバルたちの近くには、白いアーマーをつけた淡い青色の電波体がたっていた。

アイスユニコーン

- 展望台 -

スバルは今ウォーロックのおかげで電波体の攻撃をかわすことができた。淡い青色の電波体は頭に白い小さな角があり、右手には鉾を持っていた。スバルはウォーロックにお礼をいいいつでも電波変換ができるようにハンターを構えた。すると電波体がスバルに質問してきた。

「星河スバル君だよ。地球を三度救った英雄のロックマン」

「・・・君は何者？」

「この姿の名前は、アイスユニコーン。手合わせをお願いしたいんだけど、どうかな？」

「へ、なにが手合わせだ。いきなり攻撃してきやがって、戦えって言ってるもんじゃねえか。強引なやつだぜ」

「それ、ウォーロックがいえること？」

「うるせえ。それよりどうするんだ。あつち俺らのこと知ってるみたいだぜ」

「戦うしかないみたいだね。いくよ、ウォーロック。電波変換」

スバルは光に包まれロックマンの姿になっていた。

「うわ、本当だったよ」

「?どうゆうこと」

「気にしない、気にしない。じゃ、始めよう」

「ウェーブバトル ライド・オン」

「エドギリブレード」

スバルは手から剣を出すとアイスユニコーンに斬りかかった。アイスユニコーンは持っていた銚の先で受け止めた。

「ちょっと、手加減とかないの」

「よくゆうぜ。余裕って顔してるぜ」

ウォーロックが言うとアイスユニコーンはふつと笑うと距離を取り銚を振った。スバルはエドギリブレードで受け止めたが簡単に折れてしまった。

「その剣って脆いね」

「それは、どうかな?」

スバルは再びエドギリブレードを出しアイスユニコーンに斬りかかった。アイスユニコーンは受け止めずに銚を振り、剣と銚が交わったがエドギリブレードは折れなかった。

「！・・・強度だけじゃないね。威力も上がってるね」

「エドギリブレードは連続で使えば使うほど強くなるんだよ」

「便利な剣だね」

そう言うときアイスユニコーンは再び距離を取ると周りに青い球体を複数出現させた。

「フリーズボール」

アイスユニコーンは鉾をスバルの方に向けると球体がスバルに向かって飛んできた。

「スバルあの攻撃はあまり当たるなよ。凍って動きずらくなるぞ」

「分かった」

スバルは周波数変換を使いかわした。

「ちょっと、少しぐらい当たりなさいよ」

アイスユニコーンは再びフリーズボールを使いスバルに向かって飛ばした。スバルは「敵の攻撃には素直には当たらないよ」と言うときマッドバルカンを使い襲って来る球体を撃ち落とし始めた。

「・・・！スバル上だ」

「スノウフロウズン」

アイスユニコーンが持っている鉾が雪を纏い振り下ろした。スバルはとっさにエドギリブレードを出し受け止めたが、吹き飛ばされた。スバルはたとうとするが地面にはっている氷に足がとられてうまく立てない。さらに、受け止めた方の手が凍っていた。

「くそ。あの攻撃もか」

ウォーロックが言うアイスユニコーンがスバルに向かって鉾を振り下ろした。が、喉元で鉾を止めた。

「どうする？降参する？」

そのとき炎を纏った剣がアイスユニコーンに突きつけられていた。アイスユニコーンが後ろを向くとスバルが凍っていた手からファイアスラッシュを出していた。

「・・・なんで？」

アイスユニコーンは焦った様子も驚いた様子もなしに聞くとさっきまでスバルがいた場所を見た。そこにはスバルの姿はなかった。

「ヘンゲノジュツだよ。つまり君が攻撃したのは偽者だったってこと」

スバルは構えを解かずに言った。ウォーロックは出てきて「どうだ。降参するか？」と言った。

「あゝあ、降参。変わり身ってあり？」

アイスユニコーンはそう言うと電波変換を解いた。そこには瞳

と髪が薄い青色で、背はスバルと同じぐらいの女の子が立っていた。スバルも電波変換を解いた。

「君は誰？」

「・・・私のこと覚えてないの？」

女の子はスバルを見ながら聞いた。スバルは思い出そうと記憶を探った。

「ごめん。分からない」

「そっか。まあ、仕方ないかな。小学二年生の頃だったし」

「小学二年・・・あ、もしかしてアオイちゃん？」

「思い出してくれたんだ。そうだよ。久し振りスバル君」

スバルは思い出したようで、アオイと呼ばれる女の子と話し始めた。そんな中状況が呑み込めてないウォーロックはただボーとしていた。

「・・・おいスバル。この女だれだ？」

「あ、ウォーロック。この子は海月アオイちゃん。小学二年生の時の友達だよ」

「ウォーロックだね。はじめまして」

ウォーロックは気が合わないのかそっぽを向いた。

「そういえば。何で僕がロックマンだって知ってるの？」

「ああ、それね。この子に聞いたの」

アオイはそう言うのとハンターから頭に角がある白色の電波体を出した。

「スバルさんにウォーロックですね。初めまして、私はペガサス様の使者ユニコーンと申します。」

ユニコーンはスバルとウォーロックに自己紹介をした。

「え、ペガサスってあの三賢者の？」

「はい。ペガサス様からFM星で起きたことをスバル様に伝えるようにと言われて参りました」

「・・・FM星で何かあったのか？」

「実はアンドロメダの鍵が盗まれたのです」

「アンドロメダの鍵が盗まれただって」

ユニコーンはスバルの驚きように少し戸惑っている。

「いえ、鍵じゃなくて鍵の設計図が盗まれたのです」

「鍵の設計図？そんなものがあったの？」

「何でケフェウスのやろうはそんなものを持つてたんだ」

ウォーロックはユニコーンに聞くと今まで三人の話を聞いていたアオイが言った。

「・・・そのFM王だっけ？その人がどんな人かは分からないけど多分持つておきたかったんじゃない？いざとゆうときのための力を」

「話が逸れました。それで、設計図を盗んだものはFM王に不満を持つFM星人の反逆者だそうです」

「そんなことが起きてたんだ。ケフェウスは大丈夫かな」

スバルはケフェウスを心配しているようだがウォーロックは興味ないと言う顔をしている。

「それで、設計図を奪った電波体たちって何処にいるの？」

「それは・・・実はここ地球に居るらしいんです」

「！！ち、地球に来てるの？」

「はい。それを伝えようにも地球との連絡が取れなので我々が来たのです。」

「我々ってことは、てめえ以外にも誰か来てるのか」

ウォーロックは珍しくまじめそうな様子で聞いた。

「私以外に二人。レオ様、ドラゴン様の使者のものが来ています」

「そうだったんだ。え、てっことはユニコーンはアオイちゃんのウィザードなの？」

「ええ、実はそうなんです」

スバルはユニコーンに聞くとユニコーンは申し訳ないような様子で言った。スバルはアオイを見た。

「スバル君どうしたの？」

「アオイちゃんはいいの？危険な目に遭うかもしれないんだよ」

「うーん、まあそうなるんだろうけど、私はいいわよ」

スバルは何か言いかけたがアオイに止められた。

「それから、明日このことを電波変換だっけ？それができる人たちに教えておきたいからスバル君集めてくれる？」

「だったら、明日WAXAに行こう。そこなら暁さんたちも居るし」

「分かったわ。明日レオとドラゴンの使者たちもここに連れてくるから後のことはよろしく」

「うん、明日学校が終わったらここに来るね」

アオイは「了解。じゃあ、また明日」と言うと電波変換をして帰っていった。スバルはしばらくの間立ったまま考え事をしていたよ

うだが、ウォーロックに「そろそろ帰らないと怒られるぞ」と言われて家に帰ることにした。

スバルは玄関に入ると「ただいま」と言っけてリビングに向かった。リビングにはあかねがテレビを見ていた。

「あらスバルお帰り。遅かったはね何かあったの？」

「うん。展望台でアオイちゃんにあつたよ」

「アオイちゃんって小学二年生のときにいた？」

「用があつたらしいよ」

「そう。お風呂沸いてるわよ」

「うん。分かった」

スバルはそう言うと言分の部屋に行つて荷物を置いた後お風呂に入るために降りていった。

スバルはお風呂から上がると自分の部屋にあるベットに寝ころんだ。すると、ハンターからウォーロックが出てきた。

「さつきから何考えてんだ」

「いや、ケフェウスのが心配だね。それにしても、FM星人がまたやって来るなんて」

「そうだな。けど、地球を守るためだったら戦うんだろ」

「うん。当たり前だよ」

ウォーロックは「明日遅れるぞ。さっさと寝ろ」と言った。

「分かった。お休みウォーロック」

スバルは布団に入り眠りについた。

アイスユニコーン（後書き）

戦闘描写が短かったですかね。

感想・アドバイスよろしくお願いします。

自己紹介

「コダマ小学校」

スバルは昨日ユニコーンに聞いたことを考えていたらしく遅刻ギリギリで学校に来た。教室に入った瞬間ルナに怒られたのはいうまでもない。スバルはみんなに「おはよう」と言って席に座ると先生が教室に入ってきた。

「（・・・昨日ウォーロックの言うとおりにすぐに寝ればよかった）」

スバルはまだ眠たそうにしていた。先生が出席を取り終わったようで今日の日程について話していた。

「よし。これで一通りは終わったな。じゃあ、今から昨日こられなかった転校生を紹介するぞ。入ってきてくれ。」

先生がそういうとドアからスバルより少し背が高くて頬に傷がある男の子が入ってきた。

「緋哉^{ひかい}竜牙^{りゅうが}です。これからよろしくお願いします」

「えーと、席はスバルの隣だな」

竜牙は荷物を持って席まで歩いて行くとスバルの前でとまった。スバルは竜牙に見られていることに気づいてスバルも竜牙を見た。竜牙は笑顔を作って「よろしく」と言って席に座った。スバルも「よろしく」と言った。

「よし、ホームルームはこれで終わりだ。授業の準備を忘れずにな」

先生は教室から出て行った。スバルの周りにルナたちが集まってきた。

「まったく、昨日注意したばかりじゃないの。何でギリギリで来るのよ」

「本当ですね。今日なんか遅すぎてスバル君を置いてきましたし」

ルナとキザマロが朝のことを話しているとミソラが「何かあったの?」と聞いてきた。

「うん。ちょっといろいろあってね。あ、そうだみんな今日WAXAに来れる?」

みんなは行けると言った。ツカサがスバルに聞いてきた。

「何か分かったの?」

「うん。学校が終わったら展望台で待ち合わせしてるんだ」

「そうなんだ」

「ん?けど、先生らが俺とツカサ、スバルにミソラは昨日授業に出てないから放課後補習授業があるらしいぞ。」

「え、なにそれ聞いてないよ」

スバルは本当に？と聞くように言つとツカサとミソラが「そうらしいよ」と言つた。そこにドアが開き先生が入ってきた。

「なにしている。授業始めるぞ」

みんなは席に着いた。スバルは困つたなという顔をしていた。ウオーロックはハンターからスバルに聞いてきた。

「何だ、遅れたら何かまずいのか」

「あゝうん。遅れたら委員長みたいに説教するときがあるからね」

「スバル。ま、あれだ、がんばりな」

スバルは「連絡の取り方を聞いておけばよかった」といつていた。

「よし、これで終わりだ。みんな気おつけて帰れよ。それと、スバル、ミソラ、ツカサ、ジャックは補習があるみたいだから終わってから帰れよ。」

あれからスバルはルナ、ゴンタ、キザマロに展望台に行つてアオイに遅れることを伝えてほしいと頼んだが生徒会の仕事があるようで断られた。それ以外にもいろいろ考えたがアイデアが思いつかなかった。ホームルームが終わってから、少したつと先生が入ってきた。

「四人ともいるな。じゃ、補習授業を始めるぞ。」

「あの〜先生、用事があるので補習は今度ではダメですか？」

「来週からは時間が取れなくなるから無理だな。急用か？」

「いや、急用と言うほどじゃないですけど」

「だったらいいな。始めるぞ。教科書の23ページを・・・」

先生は補習授業を始めた。ミソラ、ジャック、ツカサは授業をしっかりと受けていたが、スバルはこのあとのことを考えていて先生の話があまり耳に入っていなかった。

- 約三十分後 -

「よし、これで補習授業は終わりだ。気おつけて帰れよ」

先生は持ってきたノートや教科書を持って教室から出て行った。

「やっと終わったね」

「長かった」

「三十分ぐらいしかたってないけどね」

「え、そんなにたってるの？まずい・・・」

ミソラ、ジャック、ツカサが話している中、スバルあせり始めたと思うと荷物をまとめた。

「スバル君どうしたの？」

「ごめん。ちょっと展望台に行ってくるね」

スバルは荷物を持つと走って行った。ミソラは「ちょっと、スバル君待つてよ」と言つてスバルを追いかけた。ツカサとジャックはどうしたんだろと思ひながら荷物を持ってスバルたちを追いかけた。スバルは廊下を走つて角を曲がつたとき誰かとぶつかった。

「イタタタ・・・」

「ご、ごめんなさい大丈夫ですか？あ、」

スバルがぶつかつて謝つたときミソラたちが来た。

「大丈夫スバル君？あ、たしか君は緋哉君だったよね」

ミソラはスバルが大丈夫か聞いた後ぶつかった方の相手を見て言つた。竜牙はスバルとぶつかったところを手で押さえていた。

「・・・なんなんだよいきなり飛び出してきて」

「ごめん。緋哉君ちょっと急いでいて、その・・・」

緋哉はため息をつく「べつにいいよ」と言つて立ち上がった。

「ところでやけに急いでいたようだけど何かあったの？」

「あ、やばい速く行かなきゃ」

スバルは立ち上がるとまた走り出した。緋哉はミソラたちに「何があったの・・・？」と聞いた。

「うーん、まあ、話は後にしてスバル君を追いかけてようよ」

ツカサが言うところ、ツカサ、ジャックは後を追いかけた。緋哉はまたため息をついて四人の後についていった。その途中に仕事が終わったのかルナたちと合流した。

スバルが学校の校庭に出て校門に向かった。スバルが校門から出て展望台に向かおうとしたとき声を掛けられた。スバルは声のした方を見るとアオイ達が出た。アオイはものすごい不機嫌な様子だった。アオイの近くには藍色の髪が肩まであり、寂しそうな目をしてる男の子と瞳が赤色で髪は黒の力が強そうな男の子二人が出た。

「何なのよ。学校が終わったらすぐにWAXAいくって言ったのにどれだけ待たされたと思ってんのよ。」

「アオイちゃんごめん。ちょっと急用ができてそれで・・・」

「うるさい！もう、言い訳するところは変わってないんだね」

スバルは遅れた理由を説明しようとしたが、言い訳扱いされた。スバルは肩を叩かれたように振り向いて見るとミソラ達が出た。ミソラとルナは不機嫌そうだった。

「ねえ、スバル君子の人たち誰なの？」

「あ、もしかして響ミソラちゃん？わあ、本物だ。あれ？でもな

んで居るの？」

ミソラがスバルに説明を求めたときアオイがミソラの手を取っていた。

「おい海月。先に自己紹介をした方がいいんじゃないのか？俺もまだアレスに事情を聞いただけでよく分からないんだが」

アオイの近くにいる赤い瞳をした男の子が言った。

「それもそうだね。私は海月アオイ。よろしく」

「俺は赤瀬宵磨あかせしやうま」

「僕は空慰照矢そらいいてるや」

アオイ、赤い瞳の男の子、藍色の髪をした男の子の順に言った。

「星河スバルです」

「響ミソラです」

「コダマ小学校生徒会長の白金ルナよ」

「俺は牛島ゴンタだ」

「最小院キザマロです」

「・・・ジャックだ」

「えっと、双葉ツカサです」

「コダマ小学校に転校してきた緋哉竜牙です」

アオイたちが自己紹介したのでスバルたちも順番に自己紹介した。自己紹介が終わると宵磨がスバルに近づいた。

「星河スバルってことは君が英雄のロックマン？」

「あ、えっと、それは・・・」

スバルは宵磨のいきなりの質問に対して竜牙を見ながらどう答えようかと考えていた。スバルの視線に気づいたようで竜牙は落ち着いたまま言った。

「安心して。誰にも話さないよ」

「ありがとう。うん、僕がロックマンだよ」

スバルは竜牙にお礼を言つと宵磨の質問に答えた。

「ところでさ、スバル君ここにいる人全員関係者？」

「うん。一応関係者だよ」

「ねえ、僕らのウィザードも紹介しておいた方がいいんじゃないの？」

黙っていた照矢が言った。

「それもそうだね。ウィザードオン」

アオイがユニコーンを出すと宵磨と照矢もハンターからウィザードを出した。宵磨のハンターからはレオに似た姿のウィザードが、照矢のハンターからは灰色の翼があるウィザードが出てきた。

「ずいぶん懐かしいやつが揃ってるな」

「何だ、牛カルビにカラスもいるのか」

レオに似たウィザードが言うとゴンタとジャックのハンターからオックスとコーヴァスが出てきた。

「ブロロロ・・・今すぐ丸焼きにしてやろうか？」

「ケケケ・・・アレス今すぐバラバラにしてやろうか？」

「何だよオックスにコーヴァス。ちょっとしたジョークじゃないか」

コーヴァスとオックスは「うるせえ」と言っアレスと呼ばれたウィザードを追いかけた。ユニコーンと灰色のウィザードはその光景を見てため息をついていた。スバルたちは三体のウィザードの追いかけてこを啞然とした状態で見ていた。

「・・・ねえ、ウォーロック。あの、コーヴァスとオックスが追いかけている電波体って誰？」

「あいつは、アレス。FM星にいた頃の知り合いだ。ああゆう風にしょっちゅうからかわれた」

「それと、白い角がある電波体がユニコーン。灰色の翼がある電波体がディムネスよ」

ハープがスバルたちに紹介するとユニコーンとディムネスが挨拶した。

「さて、自己紹介も終わったことだし、あとはWAXAだけ？いきながら話そうよ」

「それもそうだね」

みんながアオイの意見に賛成するとまだ追いかけてくをしている三体をハンターに戻してスバル達はWAXAに向かった。

自己紹介（後書き）

勉強が忙しくなり投稿がさらに遅れるかもしれません。

感想・アドバイス等よろしくお願いします

動き出すものたち

- ウェーブライナー -

今スバル達はウェーブライナーの中で楽しく話し合っている。ミソラとルナはアオイと仲良くなり、宵磨はジャック、ゴンタ、竜牙と気があつたらしくウィザードのことについて話していた。キザマロは照矢がいがい物知りだったようでマニア的な話をしていた。オックスとコーヴァスはアレスをまだ追いかけていて他のウィザードはそんな光景をあきれたように見ていた。スバルがみんなを見ているとツカサが言った

「聞いたよ。今回の事件について」

「え、誰から？」

「ジェミニから。ウィザードたちのほうが理解が早いと思ったみたいで、ユニコーンたちが話してくれたみたいだよ」

「そうなんだ」

「ところでさ。スバル君ってアオイちゃんと知り合いみたいだったんだけど、どうゆう関係？」

「どうゆうって、二年生の友達だったんだよ」

「へへえ、そうだったんだ」

スバルとツカサはWAXAにつくまで雑談などをしていた。

- W A X A -

WAXAにはいるとスバルはサテラポリスの人に「暁さんに会いたいですけどどこにいますか」と聞き教えてくれた部屋に向かった。部屋に入ると中は真っ暗で誰かが寝ているようだった。ジャックが電気をつけると机でうつぶせになって寝ていた暁が目を覚ました。スバルたちが暁の顔をみるとほとんどみんながヒイタ。

「あ、暁さん。どうしたんですか？まるでオバケですよ」

「・・・何だお前らか。しかたないだろう二日続けて寝ずに仕事していたんだ。ついさつき終わって寝ていたのに起こしやがって。それに、オバケはひどいだらブツブツ・・・」

ミソラが言ったことに不満を持ったのか一人でいろいろ言い始めた。アオイはスバルに近づいて聞いた。

「ねえ、この人がサテラポリスのエース暁さん？」

「うん。なんだか、仕事が大変だったみたいだね」

すると暁はさっさと寝たいのか「用はなんだ」とぶっきらぼうに聞いてきた。

「え」と、FM星人の数名がこの地球に来ていることにつてなんですけど」

スバルが言うと暁は眠気が消えたのか真剣な顔つきになった。

「FM星人が地球に？本当なのか」

「はい」

「分かった。ちょっと待ってる。」

暁はハンターを取り出してヨイリー博士と長官を呼んだ。

「今、ヨイリー博士と長官を呼んだから少し待っていてくれ。ところでスバル。」

「何ですか？」

「なんだか俺が知らないやつがいるようなんだが誰だ？」

暁が言うところ、宵磨、照矢の順に自己紹介した。

「でこっちが、僕らの学校に転校してきた・・・」

「緋哉竜牙だろ。」

「えっ、暁さん知ってたんですか？」

「ああ、前に少しな」

暁がそう言ったのでスバルたちが竜牙を見ると「いろいろあつてね・・・」と言った。そこに、ヨイリー博士と長官が入ってきた。

「暁くん何かあったのかい？」

「あら、みんないらっしやい。」

「ヨイリー博士、長官こんにちは」

スバル達が挨拶すると暁はアオイ、宵磨、照矢、竜牙を紹介した。

「さて、スバル分かったことを教えてくれ」

「はい」

スバルはまずアオイたちのウィザード達がAMせい of 三賢者の使者であること。FM星でアンドロメダの鍵の設計図が盗まれたこと。地球との連絡が取れなくなったためユニコーンたちが地球にきたこと。設計図を盗んだFM星人が地球に来ていることを話した。

説明し終わると長官は「そうか・・・」といって今後のことを考えていた。すると暁がユニコーンたちに質問した。

「その設計図なんだが、アンドロメダの鍵を作るのに最低どのくらい掛かる？」

「材料はあまり見ることがない物ですから集めるだけで多分一ヶ月ちよつとはかかるでしょう」

「それに、エネルギーを吸収したりするために膨大なデータが必要ですからさらに掛かりますね」

「材料、膨大なデータを集めていたらは一週間ちよつとぐらいですね。組み立ては簡単と聞いていますから。」

ディムネス、ユニコーン、アレスの順に答えた。長官が言った。

「つまり、相手の人数は分からないが、材料・データを集めるだけで一ヶ月掛かり、鍵を組み立てるのは一週間で出来るということだな」

ユニコーンたちは「はい」と答えた。

「それに、ユニコーンちゃんたちの話を聞くとFM星人たちは一週間ぐらい前に地球に来たってことね」

ヨイリー博士が言うとユニコーンたちは否定した。

「いえ、FM星人が来たのは遅くて二日前です。鍵の設計図が盗まれたとレオ様に聞いてすぐに我々も地球に向かったんですから、一週間前なんてことはありません。」

「だが、FM星と連絡が取れなくなったのは一週間前なんだ」

暁の言った事実にはディムネスは「そんな、バカな」といった。スバルは「どうゆうこと？」と言った。

ユニコーン、ディムネス、アレスは地球との連絡が取れなくなったのは二日前ぐらい前なのに、WAXAはFM星との連絡が取れなくなったのは一週間前というのだ。FM星から地球に来るのに五日も掛かることはない。しかも今はノイズウェーブもほとんどの電波体が使うことができ、ノイズウェーブを使えば二日ぐらいあればFM星から地球に行くことが出来る。

「・・・お前らは地球に来るのにノイズウェーブを使ったよな？」

「はい。それを使えば地球にはすぐにいけると聞いていたので」

暁の質問にアレスが答えた。

「ノイズウェーブになにかあるな。長官、こんど調査班をだしていいですか？」

「いいだろう。」

長官は暁のノイズウェーブ調査を許可した。

「あ、それと。スバルたちには悪いんだがまた力を貸してくれないか？」

「つてことは、遊撃隊を復活させるんですか？」

ミソラが手を上げて聞いた。

「ああ、FM星のことを聞くとWAXAだけだったら無理だと思っただ。今考えているメンバーを言うぞ。」

暁はスバル、ミソラ、ゴンタ、ジャック、ツカサ、アオイ、宵磨、照矢を順番に呼んでいった。

「今呼んだ中で無理だというやつはいるか？」

「あの、僕戦いとかそうゆつの得意じゃないんですけど・・・」

暁の問いに照矢はおそろおそろ聞いた。

「得意じゃなくていいさ。戦いは経験だからな。他に質問とかないか？」

スバル達は何も言わずみんな覚悟を決めたような顔つきでいた。

「よし、サテラポリス遊撃隊再結成。さっき言ったメンバーの中に俺とティアも入るからな。今日はありがとう。気をつけて帰れよ」

暁はそういってなぜかジャックも連れて部屋から出て行った。ジヤックは「おい、何で俺も連れて行くんだよ」と叫んでいた。

「そういえば。ヨイリー博士ウイルスの大量発生の際にあった装置の解析どうでしたか？」

「それがまだなのよ。がんばってはいるんだけどね。」

「装置って何ですか？」

スバルとヨイリー博士が話していると、話の中に出てきた装置についてアオイが聞いてきた。スバルは昨日あったことを説明した。説明すると宵磨が言った。

「そんなことがあったのか。それって地球に来たFM星人と関係があるのか？」

「それはまだ分からないわね」

「ヨイリー博士。私の友達に装置・データーの解析とかについて

詳しいと言つか、そうゆうことが得意な人がいますけど、よかつたら紹介しましょうか？」

「おい、海月。まさかあいつか？」

「あたりまえでしょう。彼意外誰がいるのよ。」

「まあ、確かにあそこまで行けば得意というより天才だな」

「その子名前は何ていうの？」

「奏助。^{そうすけ}雪島奏助です」

「奏助ちゃんね。こんど紹介してね。それじゃあ、私はまだ仕事があるから行くわね。」

ヨイリー博士はアオイと宵磨との話が終わるとヨイリー博士は部屋から出て行った。長官はスバルたちを出入り口までおくと「それじゃあみんな、気をつけて帰るんだよ」といった。

スバルたちがWAXAからだと照矢は「僕、用事があるから先に帰るね」と言つて電波変換して帰つて行った。すると、宵磨も「俺もこれから仕事があるから先に帰るな」といつて照矢と同じで電波変換をして帰つていった。スバル達はウェーブライナーまで歩きながら話をしていた。

「ねえ、アオイちゃんつて宵磨君と知り合いなの？」

「うん。同じ学校だからね」

「そういえば、アオイちゃんはどこに住んでいるんですか？」

ツカサの質問に答えたあとキザマロが聞いてきた。

「えっと、私と宵磨君はリステータウン。それと、照矢君はたしかフレイグタウンだったかな？」

「リステータウンってたしか、今度おれたちが社会見学で行くところだったよな委員長。」

「え、社会見学？」

「・・・スバル君。まさか、先生の話聞いてなかったの？」

ルナは社会見学のことを聞いていなかったスバルを今にも怒り出しそうな顔で見た。

「あ、えっと、事件のことを考えていて聞いてなかったというか、なんと言つか・・・」

「まったく。明後日の土曜日、リステータウンにある『ループ・インフォメーション』を見学することになったのよ」

「今日の放課後にその打ち合わせがあったんですよ」

ルナが説明するとキザマロが言った。

「え、明後日なの？ 私たちも授業で『ループ・インフォメーション』を土曜日に見学することになってるの」

「じゃあ、一緒に見学することになるのかな？」

「そうだいいね」

スバル達はそれからウェーブライナーに乗り家に帰るまで楽しんで話していた。

- ??? -

外は満月が町を照らしている。その光が窓から差し込んでいた。ここは廃墟となった工場らしく古くなってボロボロの機械が沢山ある。機械の上に突然影が現れた。影は一つではなく五つあり全部電波体の様だ。沈黙が支配している中、一人の電波体が口を開いた。

「反逆者が揃うのも久し振りだな。まさか、一週間もあつたのにパートナーが見つかっていませんなんてことはないよな？」

「連絡したでしょ。それにしてもサイレント、あなたに合う周波数を持つ人間がいたなんて意外だったわ。」

「スウィフトさんよ。俺をからかってんのか？」

最初に話したのはサイレントと呼ばれているらしく殺気のコもった低い声で言った。一方サイレントをからかったらしい電波体はスウィフトというらしく少し声が高いようだ。

「二人とも話はそれぐらいにして速く話を終わらせましょうよ」

「速く終わらせたい理由はパートナーが心配だからか？えらく地球^{うち}の生活に慣れているようだな」

サイレントは冷たく言い放った。

「・・・ところで僕らを集めた理由は何ですか？リーダー」

名前の分からない電波体が会話を聞いていた電波体に向かっていった。

「そのことなんだがな。A M星の三賢者の使者のやつらがロックマン達に接触した」

「へへえ、意外だね。てっきりF M王が来ると思ったのに」

スウィフトが残念そうに言うとサイレントが言った。

「使者とかいうやつが来たってことはやっと暴れることが出来るんだな。さあてどこの人間どもを血祭りにしてやるのかな？」

「サイレント、悪いがお前の出番は後だ」

「ちつ、せつかく楽しくなってきたと思ったのによ」

リーダーと呼ばれる電波体が言うとサイレントは短剣を仕舞った。

「やつらはこの土曜日にリステータウンにあるアドミストとかいうところに行くようだ。リミスお前が行ってくれないか？」

「・・・僕ですか。まあいいですけど、パートナーがなんて言うか

な
」

「その点は何とかしろ。目的はやつらの力量を量ることとそこにある『ループインフォメーション』の情報処理データなどを奪ってきてくれ」

「・・・了解。何とかしてみます」

「今日の話し合いはここまでだ。みんな帰っていいぞ」

リーダーの電波体が言うともうそこには影は一つもなかった。

動き出すものたち（後書き）

暁の顔は想像にお任せします

社会見学

・コダマタウン

今日は土曜日。スバル達は社会見学でリステータウンに行くため学校の校庭に集まっていた。クラスの人が集まってる中ルナはなぜか今にも怒りそうな態度を取っていた。

「遅い、遅い、遅い・・・スバル君、ゴンタはまだ来ないの？」

「う、うん。今キザマロが呼びに行っているよ。」

どうやら、ゴンタが寝坊して、キザマロが起こしに行っているみたいだ。

「それにしても遅いねゴンタ君。もうすぐ出発なのに。」

ミソラは校庭を見渡しながら言った。ツカサとジャックはクラスのしおりを作るのや先生たちの荷物を運ぶのを手伝っているようだ。スバルたちが話していると遠くからキザマロが走ってくるのが見えた。近くにはゴンタもいた。

「あ、ルナちゃん二人とも来たみたいだよ」

ミソラがルナに言うときザマロとゴンタが息を切りながらスバルたちの近くに来た。

「はあはあ・・・い、委員長。ゴンタ君を連れてきましたよ」

「・・・俺もう歩けねえぜ」

するとゴンタは地面に座った。

「ゴンタ！あなたもいつになったら遅刻ぐせが直るのよ」

「す、すまねえぜ・・・」

ルナが気の遠くなるような説教を始めた。ルナの説教が始まって少しすると先生たちがクラスのみんなを集めて出席をとり始めた。

「みんないるか？遅刻しているやつはいないか？」

「あれ？先生、緋哉君がいないようなんですけど」

先生が出席を取っているとスバルが竜牙が見あたらないことにきずいた。

「そっいえば竜牙の姿が見えないな。誰か知ってる人はいないか？」

みんなに聞くと校門の方からこっちに向かって走ってくる人が見えた。

「はあはあ・・・すみません・・・遅れました・・・」

「おい、緋哉遅いぞ。寝坊でもしたか？」

「はあ、まあ、そんなところです」

緋哉は先生に理由を言々とスバルの近くに來た。

「おはよう。スバル君にみんな」

「おはよう緋哉君。珍しいね寝坊するなんて」

「うん。昨日いろいろあつて夜更かししちゃったんだよね」

「次から送れずに來なさいよ」

竜牙はルナの注意に軽く受け答えすると先生によばれたらしく先生のところに向かった。

各クラスの出席確認が終わったみたいで生徒たちはバスの中に入っていた。

バスに乗ると先生が言った席に座った。スバルの隣はミソラで、ツカサは緋哉の隣、キザマロはゴンタの、ジャックはルナの隣に座った。クラスのみんなが席に座るとバスが動き出した。

「よし、リステータウンまで時間があるからみんな自由にしていっていいぞ」

「ねえ、スバル君。リステータウンってどんなところなんだろ
うね」

「うん、本で少し見たことがある程度だからよく分からないよ」

「そのことなら僕にお任せを」

スバルとミソラが話していると前の席にいたキザマロがスバルたちのほうを向いてリステータウンについて説明し始めた。

「リステータウンは世界で有名な企業が沢山あるところです。僕らの持つているハンターも作られているそうですよ。そんな大企業がある中でアドミストという会社にループインフォメーションがあるんです。それから・・・」

「キ、キザマロ。リステータウンについてだいたい分かったからもういいよ」

スバルはキザマロが暴走し始める前に話を止めた。キザマロは「そうですか」と言ってゴンタと話を始めた。

「・・・スバル君もあなることがあるよね」

「え、そうなの」

「うん。星について話し始めるとなるよ」

「そうかな・・・」

スバルとミソラはリステータウンにつくまで楽しそうに話し始めた。

・リステータウンー

リステータウンにはいると周りには大きな会社が沢山あり多くの人が行き来していた。バスが駐車場にとまるとスバルたちがバスか

ら降りてきた。クラスごとに並び先生たちの指示を待った。前には先生たちの近くにアドミストの従業員の人たちがいて何か話しているようだった。話が終わると先生が言った。

「みんな忘れ物はしていないな。これからしおりに書いてある通り各班に分かれてアドミストの人たちに中を案内してもらいます。自分たちが調べることをしっかり聞いたりするんだぞ。時間になったらここに集合分かったな？」

みんなは「はい」と言うとはに分かれて案内してくれるアドミストの人たちに挨拶をし、中に入っていた。

「僕は西村さとし。僕が君たちの案内役であってるよね？」

「はい。私は白金ルナと申します」

ルナにつづきスバル達も自己紹介をした。

「すまないね。本当はもう一人いればいいんだけど今はとても忙しくてね。それに、君たちと同じ団体が来ててね。迷子にならないように気おつけてね」

西村はスバルたちに言うアドミストの中に入っていたのでスバルたちはあとについて行った。

・アドミストー

「ここが情報処理室。ここで、ニホン全国から送られてくる情報や映像などのデータを整理するところです」

西村に案内されてきた部屋はコンピュータが百台近くあり従業員の人たちが画面と向き合ってキーボードを叩いていた。中には他にもスバルたちと同じ生徒たちもいた。

「うわゝ、機械が沢山ある」

「人も沢山いるね」

「今中に入ったら仕事の邪魔になるんじゃない？」

「そう言われてみればそうよね。西村さん他のところを案内してもらいますか」

「分かった。じゃあ、ここはまたあとで次いこうか」

それからスバル達は西村に他の部屋を案内してもらった。廊下を歩いているとセキュリティがとても厳しそうなところについた。

「このさきには午後に君たちが見学するループインフォメーションがあるんだ。」

「へえゝ、この先にあるんですね」

緋哉が言うとキザマロがこのセキュリティシステムについて聞いた。西村が説明していると放送がなった。

「あ、もうこんな時間かそろそろ昼食にしようか。食堂室に案内するね。」

食堂室に移動しているときツカサが質問した。

「あの、西村さん。忙しいのにどうして二校同時に見学させてくれたんですか？」

「違う学校の人たちとも交流してもらいたくてね。なかなかうまくいかないんだけどね」

「そうなんですか」

「さあ、ついたよ。ここが食堂室。ついたときに貰った券を使つてね」

スバルたちが中に入ると他の人も昼食を食べに来ていて沢山の人^がいた。

「うわ、多すぎでしょ。」

「だったら、ジャック、ゴンタ。あなたたち席を取っておいて」

「委員長そりゃないぜ」

「何で俺も！？しかも俺らの分は？」

「だったら僕が貰ってきてあげるよ」

ジャックとゴンタはツカサに券を渡すとしぶしぶ席を取りに言った。

スバルたちが昼食を貰うとジャックたちのところに行った。席にはジャックたちのほかに三人いた。

「あ、スバル君」

「アオイちゃん。それに宵磨君」

席にはアオイと宵磨、それとスバルより少し背の低い男の子がいた。

「えっと、そっちの人は？」

「ああ、前に言っただしょ。雪島奏助君」

アオイは隣にいた男の子を紹介した。

「えっと、雪島奏助です。呼び方は自由でいいよ」

「僕は星河スバル。よろしくね雪島君」

それから、ミソラたちも来ると雪島と挨拶をした。それから、スバル達は昼食を食べ始めた。

「ところで・・アオイちゃんたちは・・ここで何してたの？」

「ミソラちゃん、食べながら話すのやめた方がいいよ」

「はは、確かに。私たちはここの一階にあるコンピューターを使って調べものしてたの」

「へへえ、一階で調べ物が出来るんだ」

みんなは昼食を食べ終わるまで楽しく雑談をした。しばらくすると放送がかかった。

「コダマ小学校の皆さん午後からの見学は一時半からです。集合場所は・・・」

「あ、もう少し時間があるね」

「だったら、みんなでいろいろ見て回らない」

ツカサの意見に全員賛成して、食器などを片付けると食堂室から出て行った。

ループインフォメーション

あれから集合時間が来たのでアオイ達と別れて集合場所に向かった。クラスみんなが集まると社長の西村さんが午後の案内を始めてくれた。

「では、みなさん今からここアドミストが誇るループインフォメーションの部屋に案内します。」

西村は服のポケットからカードキーを出すと近くにあった機械に通した。すると、ドアが音を立てて開くと目の前には円柱の形をした巨大な機械ループインフォメーションあった。ループインフォメーションの周りには画面が沢山出ていて字がびっしりと書かれているのもあれば映像がながれているのもあった。

「このループインフォメーションは一秒に数百個のデータを処理し保存しています。ここで保存したデータはサテラポリスの捜査や裁判などで使われています。」

クラスみんなが周りを見て回り始めたのでスバルたちも見て回った。

「写真や本で見たのよりもやっぱり実物の方が大きいね」

「ツカサ君の言うとおりだね。やっぱり迫力が違うね」

「緋哉君、ツカサ君。話もいいけどちゃんと調べなさいよ」

ルナが二人が話しているのを注意すると話を止めてしおりやノ

―トにメモを取り始めた。

「ん？おいキザマロ。これって何だ？」

ゴンタは近くにあったボタンを見ながら言った。

「え、ああ、それは多分・・・」

キザマロが言いかけたとき他にクラスの人がゴンタにぶつかった。ぶつかった衝撃でゴンタがボタンを押した。すると警報が鳴り壁だったところが開き中から警備ロボットが出てきた。警備ロボットの手からは電気が流れていて中にいた生徒たちを取り囲んだ。

「シンニユウシャハッケン。シンニユウシャハッケン。ハイジヨシマス」

「な、なんだこれ」

「俺ら侵入者だって。それに排除されるみたいだね」

「緋哉君、のんき言わないでください」

「ちょっとゴンタなにやってるのよ。」

「こうゆうのは普通起こした人が何とかするよね？」

「ツカサのゆうとおりだな。おいゴンタ。お前が何とかしろ」

「無理に決まってるだろ！！」

ゴンタは半分なきそうに叫んだ。ロボットが少しずつ近づいてきて今にも襲い掛かるうとしたときロボットに流れていた電流が消えて何事もなかったようにもといった場所に戻っていった。

「みんなごめんね。止めるのが少し遅れちゃったね。大丈夫だった？」

「は、はい。なんだったんですか、今の・・・」

「ああ、ここにあるデータを引き出すには暗号が必要だね。この中にあるデータは使い方を誤れば兵器に変わるからね。さっきのはいざとゆうときのための防犯装置」

西村はループインフォメーションを指しながら説明した。するとルナが手を上げて質問した。

「あの、その暗号は誰が知ってるんですか？」

「ここの社長だけだよ。さっきも言ったとおり、ここのデータを使えば簡単に兵器に変わるからね。もちろん外部に漏れないようにセキュリティーもしっかりしてるよ。」

西村はそう言う「さて、そろそろ時間だからみんな出て」とみんなに声を掛けた。みんなが移動しているとき緋哉がループインフォメーションを見たまま動いていないのをスバルがきずいた。

「どうしたの緋哉君。みんな移動してるよ」

「え？・・・あ、ごめん、ごめん。ちょっとここのデータが気になっ
てね」

「どうして？」

「さっき、社長さんが言ったでしょ。『ここにあるデータは兵器に変わる』って」

「うん。それがどうかしたの？」

「おかしくないか？何でそんな物を一箇所にまとめておいてあるんだ？普通はばらばらにしたりするんじゃないのか？」

「確かにそうだね。けど、ループインフォメーションが出来たのって、サテラポリスの捜査や裁判、過去に起きた犯罪とかを保存するためじゃないの？本にはそう書いてあったけど」

「他にもあったら？何かをするためにお偉いさんたちがニホン全国のデータを集めてるとしたら？」

「まさか。そんなことはないと思うよ・・・」

スバルは小さく笑いながら言った。

「・・・そうだね。考えすぎだな」

緋哉とスバルが話しているとミソラが戻ってきた。

「二人ともなにしてるの。ドア閉めるらしいよ」

「あ、ごめん。すぐに行くよ」

スバルは答えるとそのまま出口のドアに向かった。緋哉は少し目の前にあるループインフォメーションを見るとスバルたちのあとを追った。

今は見学のときお世話になった社員の人たちにお礼をいつている。お礼を言うのはもちろん生徒会長であるルナだ。終わると西村が少し話すと、みんなは「今日はありがとうございました」と言った。

スバルたちがバスに向かって移動しているときアオイたちとであつた。

「お前らも今帰りか？」

「うん。来たときに乗ったバスのところにむかうところなの。ところで、雪島君の姿が見えないんだけど」

ミソラは辺りを見ながら言った。

「ああ、あいつならトイレだってさ。中にいると思うぜ」

「ねえ、ついだからこのままWAXAに行かない？」

「うん。でも、これから学校に帰ってやることあるしね」

「おい、その八人なにやってるんだ。おいていくぞ」

「すみません。今行き・・・」

ルナが先生に言っているときアドミストから警報が鳴り響いた。

スバル達はアドミストの方角を見ると従業員らしき人たちが急いで戻っていくのが見えた。

「・・・何かあったみたいだね」

「どうする？状況を聞きに行く？それともそのまま帰る？」

「緋哉君、そんなこと聞かなくても分かるでしょ」

ルナがあきれたように言った。

「行ってみよう。」

「だね」

「そうだろうと思ったぜ」

スバルを先頭にアドミストに向かった。

「おいおい、先生たちにはなにもいわずかよ。・・・せんせーい、アドミストがどうなっているか気になるんで見てきます」

緋哉は少し先の方にいる先生に向かって叫ぶとスバルたちのあとを追って行った。

・アドミストー

社長の西村に状況を聞くため司令室に向かった。司令室は見学のときに案内されたのですぐに行くことが出来た。途中、従業員たち

にぶつかつたりしてはぐれたときや途中立ち入り禁止の札が合つたが無視したり色々あつたがなんとか全員司令室に行くことが出来た。

「西村さん！」

「ん？君たちは確か・・・何でここにいる。ここは立ち入り禁止だつたはずだぞ」

「それより、何があつたんですか？」

「アオイちゃんもいたのか。ループインフォメーションのなかに大量のウイルスが発生したんだ。今コンピュータに組み込んであるウイルス撃退用のプログラムを使ってデリートしているんだけどな・・・」

「だけど？」

「数が減らないんだよ。デリートし始めて五分はたっているのにウイルスの数が減らないんだ」

「ウイルスの数が減らないって・・・まさか！」

「多分、スバル君の考えている通りだと思うよ」

「行つてみるしかねえな」

「・・・西村さんループインフォメーションのアクセスキーを貸してもらえませんか？」

「何を言ってるんだ。アオイちゃん、君だって分かつてるはずだ。」

アクセスキーは渡せない」

「でも、このままじゃ・・・」

ミソラはアオイの頼みを断った西村に言いかけたとき放送がなった。誰かがかけているわけではなく自動でかかったようだ。

「シャッターが降ります。付近にいる人は気をつけてください。シャッターが降ります・・・」

放送がかかると今まで鳴っていた警報とは別のが鳴り響いた。すると、司令室の出入りのシャッターが降りた。

「え、ちよつと。閉じ込められた？」

「おい、どうなってる？」

ルナが叫ぶと西村は従業員の一人に聞いた。

「はい。ウィルスのせいで防犯用の装置が壊れたみたいです。それで、警備ロボ等が制御できません。さらに、ウィルスデリートの装置もそろそろ限界です」

「西村さん!!」

考え込んでいた西村にアオイが言った。

「・・・渡したところで君たちになにが出来るんだ」

「僕達はサテラポリス遊撃隊です」

スバルが言うと西村はスバルの顔を見た。

「僕達が何とかしてみます。だから、アクセススキーを貸してください」

「・・・君たちの名前を聞いたときに気になってはいただけど分かった。これがアクセススキーだ」

西村はスバルにアクセススキーを渡すと今度はみんなを順番に見た。

「君達も遊撃隊の一員なのかい？」

「私とキザマロ、それと緋哉君は違いますけどね」

「アオイちゃんきみもか・・・」

西村は心配そうな顔でアオイを見た。アオイは笑顔で言った。

「気にしないで大丈夫ですよ。それより、行こう。手遅れになる」

「そうだね。電波変換」

スバル達は光に包まれるとそのばにはいなかった。

メール

・ループインフォメーションの電腦―

この電腦の中に入るとき、ループインフォメーションがある部屋を見ると警備ロボットたちが部屋から出て行くところを見たがウィルスをデリートするのが先と判断して電腦の中に入った。

「うゝわ。いるねゝ」

「・・・異常だろう」

宵磨が電波変換した姿は黄色のアーマーをつけた赤色の身体をしていて、名前はアレスレオパルド。手には大岩を簡単に砕くような両手剣を片手で持っていた。

「ウォーロック。装置がありそうなところ分らない？」

「分らん。ウィルスの数が多すぎだ」

「装置のありそうなところが分かったぞ」

「え、本当？」

アオイが宵磨に聞くとアレスが出てきた。

「ここから少し先に曲がり角があります。その先にここにいるウィルスとは違う周波数を感じます。やっぱり、こうゆう器用なことはお前には出来ないよな？ウォーロックちゃん」

「・・・てめえ、後で覚えてろよ」

ウォーロックは殺気を放ちながら言った。スバル達は気にせず、ウィルスを倒しながら先に進んだ。

「氷華連月」

「炎滅斬」

アオイは鉾を器用に振り、宵磨は炎を纏った両手剣を振りウィルスを一気にデリートした。

「あの二人やるな」

「僕たちも負けてられないね」

スバルたちも二人に負けじとウィルスを倒していった。

「そこにいるウィルスの大群の中にあると思います」

「だってさ。バーニングタワー」

宵磨は両手剣を振るとウィルス達の周りから三本の炎の柱が立った。宵磨の攻撃に続くようにスバルたちもウィルスの大群に向かって攻撃した。煙がはれると、攻撃したところにはバリアに包まれた装置があった。

「・・・なんか面倒な機能が追加されてやがるな」

「だね」

ジャックの言ったことにツカサが同意した。宵磨はいきなり装置に向かって走り出すと、剣を装置に向かって振った。剣が装置に当たろうとしたとき鈍い音がしたと思うと宵磨が弾き飛ばされた。宵磨は空中で体制を立て直してうまく着地した。

「おい、宵磨。さっきから無茶しすぎだ」

「悪いなジャック。けど、こっちは経験が少ないもんでね。それに、俺は手間のかかるやり方は嫌いなんだよね」

宵磨はそう言うのと再び装置に切りかかったがさっきと同じように弾き飛ばされた。

今度はスバルたちも攻撃したがバリアを壊すことは出来なかった。

スバルたちが装置を壊そうと攻撃をしている間さらに増えたウイルスは、ウィザードたちが何とかしていた。

「なかなか壊れないね、このバリアー」

「このままだと、まずいね」

スバルは同じウイルスを同時に攻撃できるシンクロフックを使ってウイルスを倒しているとハンターが鳴った。

「こんなときに・・・もしもし」

「スバル君、聞こえる？」

かけてきたのは司令室にいたルナで、とてもあわてていた。

「司令室で使ってたウイルスデリート用のプログラムが全部壊れたみたいなの」

ルナは早口でスバルたちに今の状況が分かるように説明した。どうやら、西村達がウイルスをデリートするのに使ってた装置が壊れて守れなくなっただけらしい。すると、アオイが叫んだ。

「もう！こっちも大変なのに！雪島君がいれば何とかなるかもしれないのに。どこにいるのよ！」

アオイが叫ぶと西村が聞いてきた。

「雪島の子も来ているのか？」

「あのやろつ。まさか、外にいるんじゃないだろうな」

「あの子が着てるなら・・・こっちで探して・見・・・ザア・・・ザアアア・・・」

西村が何か伝えようとしたとき雑音が出てきて声が聞こえなくなった。

「西村さん！なんていったんですか！？」

「回線が切られたみたいだね。外との連絡が取れなくなってるよ」

「！ツカサ君、後ろ！」

スバルがツカサに攻撃しようとしているウイルスに気がついた。
ツカサはエレキソードを出すとウイルスを真つ二つに切った。

「大丈夫だよ」

「この程度のやつらに負けるわけないだろ」

ヒカルが言うとウイルスをデリートしていった。

「・・・ねえ。ここに装置があるってことは、これを置いた人がいるってことだよね？」

ミソラは言うつと宵磨がぶっきらぼうに答えた。

「そうに決まってるだろ。機械が勝手に歩いてくるわけないだろ。それに、ここのセキュリティが厳しいこと知ってるだろ」

「ってことは、セキュリティにきずかれずに入ってきたってこと？」

「そうだと思うけど、それがどうかしたの？ミソラちゃん」

「いや、ただね。西村さんが言ってたじゃない。ループインフォメイションにウイルスが入ってきたって」

「・・・電波体が入ってきたとは言ってなかったね」

「うん。ちょっとそれが気になってね。それに、こんなに広い電脳なのにウイルスもここにしかないみたいだし」

スバルはミソラの言ったことを聞くと緋哉と話していたことが頭に入ってきた。

「・・・！まさか。」

するとスバルはウィルスの大群の中から抜け出すと奥へ行こうとした。するとジャックが叫んだ。

「おい、スバル。どこに行く気だ」

「ごめん、みんな。ちょっと、奥のほうを見てくる」

「ちょ、ちょっと。スバル君」

スバルはそう言うのと奥のほうへ進んでいった。アオイもウィルスの大群の中から抜け出しスバルのあとを追って行った。

残ったミソラたちは、ともかく手分けをしてウィルスを倒していた。

「ちょっと、待ってよスバル君。どうしたの？」

「アオイちゃん。何で来たの」

「それより、いったいどうしたの？ウィルスを倒さないといけないのに突然、奥に行ってくるとか言って」

「そのことは行きながら説明するから。速く行こう」

スバルはそう言うと奥に向かっていった。アオイは「何なのよ」といいながら追いかけた。

スバルたちが奥に進んでいると電波で出来た扉が道をふさいでいた。

「ウォーロック開けること出来る？」

「無理だな。暗号が分かっていたら何とかなりそうだがな」

「アオイちゃん、ここの暗号知ってる？」

「知ってるわけないでしょ。で、なに。スバル君はこの先にあのやっかいな装置を置いた電波体がいるって思ってるの？」

スバルの考えはこうだった。ループリンフォメーションのセキュリティに気づかれずに装置を置いた電波体がそのまま帰るわけがなく、ウィルスはおとりで目的はこのデータだと考えているのだ。

「多分ね。それよりこの扉を何とかしないと」

すると、外との連絡が取れないのにハンターが鳴った。スバルは何で？ と思いながらハンターをとった。どうやらメールが送られてきたみたいだ。スバルは送られてきたメールを見ると電波で出来た扉に近づき暗号を打った。

「スバル君。暗号が分からないのに不用意にやったら・・・」

アオイがスバルを止めようとしたとき「アンゴウカクニン。カイ

「ジョシマス」と言う音声が聞こえたと思うと扉は消えていた。ウォーロックとアオイが啞然としているとスバルが言った。

「差出人不明のメールが来たんだけど、その中に暗号のことが書かれてたんだけど」

「どうやら、さっき送られてきたメールに暗号が書かれてらしい。解除した本人でもまさか本当に出来るとは思ってなかったみたいだ。」

「ともかく扉を開けることが出来たんですから速く行きましょう。ウィルスの方も大変そうだと思いますから」

「うん。行こう!」

増援（前書き）

やっと一人目のFM星人との戦闘です。

それではどうぞ。

増援

扉を解除してスバルたちが奥に進むと巨大な装置があった。装置の近くにはエアディスプレイを操作している黒いアーマを着けた黄色の電波体がいた。

「ビンゴだったな。スバル」

ウォーロックがスバルに言う。電波体はスバルたちの方を向いた。

「・・・君たちは」

「私たちはサテラポリス遊撃隊です。そこで何をしてるんですか」

「ここには暗号式の扉があったはずだけど」

「扉なら解除したよ。それより答えて。君はここで何をしているの？」

電波体はスバルの質問に答えずエアディスプレイを操作し始めた。アオイは再び電波体に聞こうとしたときウォーロックがさえぎって言った。

「・・・おい出てこいよ。確か名前はリミスだったよな」

電波体の近くに白のアーマを着けた黄色のウィザードが出てきた。

「名前を覚えてくれていたなんて光栄だね」

「悪いな。あいにく、周波数で判断したもんでな。名前は覚えてなかったぜ」

「あれ？周波数は消してたはずんだけど。ま、いっか。こっちは僕のパートナーの・・・」

「この姿はリミスライティング。そういえば、君たちの名前は？」

「私はアイスユニコーン」

「僕はロックマン。リミスって言ったよね。アンドロメダの設計図を盗んだのって・・・」

スバルが言う前にリミスが言った。

「僕達だよ。それがどうかした？」

「どうかした？じゃねえだろうが！」

ウォーロックはリミスに向かって怒鳴った。

「・・・戦うのは嫌なだけだな」

リミスライティングはそういいながら長剣を取り出すとスバルたちのほうに向き直った。

「・・・ウェーブバトル！ライド・オン」「」

スバルがリミスライトニングと戦っているころ、ウイルスと戦っているミソラたちはもう、ギリギリの状態だった。

「・・・もう限界」

「さすがに疲れた」

ミソラと宵磨、ゴンタは今にも倒れそうな様子で戦っていた。その三人をカバーするように残りが戦っていた。

「くそ！スバルのやつ。どこに行きやがった」

「・・・戦ってるな。この周波数は・・・リミスか」

ジャックがボヤいているとジェミニが言った。

「ジェミニ誰なの？そのリミスって」

ツカサはウイルスを倒しながら言った。

「リミスは電気を操れてな。実力はまあまあだったな。でも、面倒なところに現れたな」

「どうゆうことなんだ」

ジェミニサンダーでウイルスを消し飛ばした後で、ヒカルが聞いた。

「簡単にゆうぞ。ここのセキュリティーは全部あいつの手の内だ。もう使い物にならない」

「セキュリティーって防御用のも？」

「ああ。あのウイルスを出してくる装置のバリアは多分ここのだな」

「じゃあ何か。スバルがそのリミスとかゆうやつを何とかしないとこのウイルスどもは消えてくれないってか」

「そうゆうことだな」

「くそ！それまで戦わないといけないのか」

「もう俺、無理」

「おい、ゴンタ。もう少しがんばりやがれ・・・！しまった」

ジャックは不意をつかれたらしく防御に遅れた。ウイルスが攻撃したときレーザーがジャックの目の前を通り雨が降った。

「オメガレーザー」

「ゴッドレイン」

白を中心とした電波体と杖を持った電波体の攻撃で半分近くのウイルスがデリートされた。

「大丈夫？」

「遅れてすまなかったな」

「遅すぎだ。姉ちゃん、暁」

そこにいたのは、暁が電波変換した姿のアシッドエースとクインティアが電波変換したクインヴァルゴがいた。

「お前らは少し休んでて良いぞ。行くぞティア」

シドウはウイルスたちのほうを見ながら言った。

シドウたちが加勢に来る少し前、リミスとの戦闘が始まった。

「電磁砲」

リミスは周りから電気を帯びた弾丸を出した。

「二人とも気おつけてください。弾丸と弾丸の間には電流が流れています。触れるだけでマヒします」

「電流なんて見えないよ」

「基本的に電流は弾丸との間にしか流れていないはずですよ。弾丸を線で結んだときの図形の中を通らなければいいはずですよ」

「手合わせするのは初めてだが面倒な技だな」

「来るよ」

リミスは剣を振ると弾丸がスバルたちに向かってきた。スバルたちは左右に分かれて弾丸をかわした。

「・・・無駄だよ」

リミスライトニングが言うとかわした弾丸がスバルたちの方に向かってきた。

「！追尾能力もついていたの？」

「打ち落とすしかないね。フリースボール」

「プラチナメテオ」

メテオと氷の弾丸が電磁砲とぶつかり煙がたった。煙がはれる前にリミスライトニングが斬りかかってきた。スバルはエドギリブレードを出し受け止めた。

「悪いね。英雄だから手加減なんてするきないんでね。それに、一対二だからね」

リミスライトニングは鉾で攻撃しようとしていたアオイの方を見ると電磁砲を三角形が出来るように自分の前に出した。アオイは攻撃をしたが電流に防がれた。スバル達はリミスライトニングから距離を取った。

「あの技、防御にも使えるんだね」

リミスライトニングは二人を順番に見ると何を思ったのか、構えを解くと小さな装置を出した。

「・・・これはここに来る途中にあった『リビルト』の防御プログラムの制御装置だ。これを壊さないと破壊はできない」

「リビルト・・・あのウイルスを再構築する装置のこと？」

「そういえば、知らないんだっけ？」

「何でそんなことを教えてくれるの？」

「・・・」

リミスライティングは答えずスバルたちに斬りかかった。

それからミソラたちのところにシドウたちが援軍として駆けつくまで斬ったり防御の繰り返しだった。

「だゝあ、くそ、しぶといな」

「こっちは二人がかりなのに、なかなか倒せないね」

「これじゃあ、時間だけが過ぎていくだけだ。ウォーロック、ノイズはどれくらいたまってる？」

「あの、もらったPGMを使うんだな。ノイズ率は・・・！」

「?どうしたのウォーロック」

「ノイズがたまってるねえ」

「どうして」

「ねえ、まずあの制御装置を何とかしようよ」

リミスライトニングが出した制御装置は巨大な装置とは真逆のところに浮かんでいた。

「・・・そうだね。けど、どうしよう」

「私とユニコーンでリミスライトニングをなんとかしてみるから、その間にスバル君は制御装置をなんとかして」

アオイは言うത്スバルの答えを聞かずにリミスライトニングに向かった。

「どうしたスバル。速くあの装置をぶっ壊すぞ」

「うん。そうだね。ソードファイター」

アオイとユニコーンがリミスライトニングと戦っているのを見ると剣を出すと制御装置に斬りかかった。以外にも制御装置は音を立ててあっさり壊れた。

「簡単に壊れたね」

「壊れたな」

スバルたちの近くに制御装置の欠片が落ちたとき、アオイがスバルの近くに飛ばされたらしく倒れた。

「アオイちゃん！」

「おい、スバル。気を抜くな」

スバルがアオイのそばに駆け寄るとウォーロックはリミスライティングを見ながら言った。

「……」

リミスライティングは静かに剣をスバルに向けた。そのとき、リミスライティングの方から音が鳴るとエアディスプレイが出た。リミスライティングはエアディスプレイを操り始めた。

「・・・コピーまであと少しか」

「コピーってまさか！」

「ちんたらやってられないな」

スバルが構えるとリミスライティングが切りかかってきた。ソードファイターを出しカウンターを狙っているとスバルとリミスライティングの間にレーザーが放たれた。二人とも距離を取りレーザーが放たれた方を見た。そこにはアシッドエース、ハーブノートたちがいた。

「・・・増援か。案外速いな」

「みんな、それに暁さん」

「スバル君、アオイちゃん大丈夫？」

「遅れてすまなかったな」

「よう。久し振りだな。リミス」

ジェミニがハンターから出てきてリミスに言った。

「ジェミニか……。あのお前がそっちについたのか」

「話の途中で悪いがお前の目的はなんだ？」

ジェミニとリミスが話していると暁がリミスに聞いた。

「目的つか……。だいたいは想像つくでしょ」

「やっぱりこのデータだったんだ……」

「それにしても、一、二、三……。十人か。さすがにそれに比べてこっちは俺とリミスだけ」

「ひどいと言っかなんと言っか……。なんでこんなにいるんだよ！」

リミスライトニングはこの状況どうするか考えているがリミスはいろいろ文句を言っていた。

「悪いな。恨まないでくれよ」

「はあ、どうしよっかな」

暁はリミスライティングに言々とリミスライティングはため息をつくと剣を構えた。

「いくぞ！」

増援（後書き）

感想等よろしくお願いします。

逃走と謎

暁はスバルとアオイから相手の戦い方を聞き、みんなに指示を出す。とロックオンソードでリミスライトニングとの距離を一気につめ斬りかかった。リミスライトニングは電磁砲を使い防いだ。するとジャックはリミスライトニングが暁に気を取られている間に後ろにまわった。

「あんな面倒な装置を作りやがって。くらいな、フェザーシックル」

ジャックの攻撃が当たりそうなとき、リミスが電磁砲で作ったバリアに防がれた。

「バーニングタワー」

「！リミス」

宵磨は剣を振りリミスライトニングの足元から炎の柱がでた。暁とジャックはリミスライトニングから距離をとることでかわし、リミスライトニングは炎が出ていない方に跳んだ。

「いまだ！」

宵磨はツカサ達に向かって叫んだ。

「「ジェミニサンダー」」

「ショックノートフォルテッシモ」

ツカサとヒカル、ミソラの攻撃がリミスライティングに向かっていった。

「つち」

リミスライティングは電磁砲でバリアを作ったが防ぎきれずに吹き飛ばされた。リミスライティングは空中で体制を立て直すとスバルたちのほうを向いた。

「くらいやがれ。アンガーパンチ」

「後ろか！」

ゴンタがリミスライティングに殴りかかった。リミスライティングは防御が遅れてまともにあたった。リミスライティングが立ち上がる時には頭上に雨雲が浮かんでいた。

「ゴットレイン」

今度はリミスがバリアをはり攻撃を防いだ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えるか？」

リミスライティングは立ち上がりながらいった。

暁たちはスバルとアオイの周りに集まった。

「・・・おかしいとおもわないか？」

「僕もそう思います」

「ねえ、スバル君何がおかしいの？」

暁の言ったことに答えたスバルにアオイが聞いてきた。後ろには宵磨も「何がおかしいんだ」と言いたげな様子だった。

「さっき、私たちが攻撃したとき一度も反撃に出てなかったじゃない」

「そういえば。さっきから、防御しかしてないね」

「単に守るしか出来ないだけじゃない」

「そうだといいんだがな。ともかく速く終わらせよう。スバル、アオイ、いけるか？」

「はい」

「もう大丈夫です」

スバルとアオイそういうと構えた。

「よし、一気に行くぞ」

スバルはエドギリブレードを出し、アオイは鉾を構えた。

「・・・リミス。一回このあたりをふっ飛ばしていいかな？」

「うーん、いいんじゃない。数多いし」

リミスライトニングは剣から電気を出し、スバルたちの方を向くと一気に距離を詰めた。スバルもリミスライトニングに攻撃しようとしてドギリブレードで斬りかかった。スバルとリミスライトニングの剣が振り下ろされるとき、空気を切る音が鳴ったと思うとスバルとリミスライトニングの間に向かって数本の槍が飛んできた。その槍はスバル達の目の前に来ると光を放ち爆発した。

「スバル君！」

ミソラが叫ぶと煙の中からスバルとリミスライトニングが飛び出した。

「大丈夫かスバル？」

「はい、なんとか。それより今のは」

スバルがリミスライトニングのほうを見るとリミスライトニングは巨大な装置の上の方を見上げていた。

「どうしてここにいるんだ？スウィフト」

リミスが言うと装置の上から電波体がリミスライトニングのそばに降りてきた。降りてきた電波体は緑色のローブを着ていて両手には白色の手袋をはめていた。隣には緑色の身体をしたウィザードが出ていた。

「その前に言うことあるでしょ」

「・・・まあ、礼は後で言うよ。それよりなんているの？」

「リーダーがなんだか君たちが大変そうだから手伝ってやってくれって言われてきたの」

「・・・ねえ、ウォーロック。あの、スウィフトって呼ばれてる電波体もFM星人？」

「ああ。また面倒なやつが来たな」

スバルとウォーロックが聞こえないように話をしたが、まだスウィフトはリミスと話していた。

「それよりダメでしょ。まだ、データのコピーもとってないだろうに。あんたの技はあたりを滅茶苦茶にしかねないんだから」

リミスは「はいはい」としてスウィフトの話をまったく聞いていないようだった。リミスライティングはその横でエアディスプレイを操作していた。

「シドウ、どうするの？」

「話を聞かぎりスウィフトってやつも仲間みたいだな。あの二人とも拘束するぞ」

シドウが言うとりミスライトニングがローブを着た電波体に言った。

「えっと、確かモウメントスウィフトだったよね。コピー終わったから逃げるの手伝ってくれない？」

「分かったわ。そこから動かないでね」

スウィフトはそう言うとりミスライトニングとモウメントスウィフトの足元に魔方阵が現れた。

「！まずいわ。逃げるつもりよ」

ハープの言葉に一番に反応して行動したのは暁だった。暁はロックオンソードで切りかかろうとしたが、リミスの電磁砲に邪魔をされた。魔方阵から光がでるとスウィフトは「じゃあねー」と言いながら消えた。

「ハープ今のは？」

「スウィフトの転送技よ。たぶん、追いつけないわね」

「っち、逃がしたか」

「これからどうするんですか、暁さん？」

「ここはサテラポリスに任せてみんなは俺と一緒にWAXAに来てくれ」

暁がみんなに言うとツカサが暁に聞いた。

「あの暁さん。照矢君はどうしたんですか？」

「あ、そういえばそうだ。あいつはどうしたんですか？」

宵磨も今気がついたようだった。

「照矢は家庭の事情でこられないらしいから、WAXAに来てくれって言うてある。さあ、それより早く行くぞ」

「ちょっと待ってくださいよ。私たち学校の授業で来てるんですけど」

「俺がすでに言うてあるからその心配はないぞミソラ」

「・・・職権乱用？」

「さあ。違うんじゃないかな？」

アオイとミソラが曉に聞こえないように話していた。

「あ、それで。外にいるルナ達もWAXAに来るように言うてあるから連絡は取らなくていいぞ」

「私は少し遅れていきますね」

「何か用事があるのかアオイ？」

「雪島君を探しに行きたいんですけど」

アオイが言うつと宵磨が「メールで伝えればいいじゃないか」と言った。アオイはハンターを出すとメールを打ち始めた。

「これでよしと」

「外には報道人が沢山いるようだからこのまま行くぞ」

暁が言つとスバル達は電腦から出て行つた。

- W A X A -

スバルたちがWAXAに来ると部屋にはヨイリー博士と照矢がいた。照矢はスバルたちを見つけるとアドミストにいけなかったことを謝つた。スバル達は「用事があつたから仕方ないよ」と言うことで許すと、アドミストでの出来事を照矢に話した。

だいたいの説明が終わると暁がルナたちを連れてきた。

「はゝあ、酷い目にあつたわ」

ため息をつきながら入ってきたのはルナだった。

「何かあつたの？」

「実はですね。スバル君たちと連絡が取れなくなつた後、閉まつてたドアが開いたんですよ」

「そしたら、いきなり警備ロボが入ってきて中にいた人全員が外に出されちゃつてね」

「外に出たら出たで報道人の人たちに質問ぜめにあつたり、本当酷い目にあつたわ」

キザマロ、竜牙、ルナの順に説明した。ルナだけではなく二人とも疲れた様子だった。

「よし。雪島はまだ来てないみたいだが先に今日あったことについて話を聞かせてもらおうか」

暁が言つとスバル達は椅子に座りリミスライトニングとの戦闘、ウイルスを再構築する装置のことをリビルトと呼んでいること、データーを盗まれたあげく逃げられたことを話した。

「スバル君やみんながいたのにあっさり逃げられちゃったの？」

「はい。その通りです」

ルナ言葉が効いたのか顔を下に向けて言った。

「ところでウォーロックちゃんたちに聞きたいんだけど、そのリミスとスウィフトについて教えてくれない？」

すると、ハンターからウォーロックとハープ、ジェミニが出てきた。

「リミスはたしかレチクル座のFM星人でジェミニと互角ぐらいの力を持ってたよな」

「俺とあいつはFM王の右腕がどっちかで戦ったことがあるぜ」

「スウィフトはエリダヌス座のFM星人で転送技が得意だったわ」

ウォーロックは「俺たちが知ってるのはこのくらいだ」と言つと

思い出したようにスバルが言った。

「そういえば、リミスライティングとの戦闘中ノイズがぜんぜんたまってなかったんですけど」

「そんなはずわないだろウイルスをあんなに倒したんだぞ。たまらない方がおかしいぞ」

スバルは「でも・・・」と言いかけたが言葉を飲み込んだ。

戦闘中にノイズが異様なぐらい溜まってなかったこと、リミスライティングたちは盗んだ膨大なデータを何に使うのか。スバルたちがさまざまなことを考えている中、沈黙が部屋を支配した。

逃走と謎（後書き）

リミスとスウィフトはもう少し有名な星座のほうがよかったですね？

感想、アドバイスよろしくお願いします。

理由

静かになった部屋ではスバルたちが考えに没頭していた。

「・・・あのさあ。なんなのこの空気」

スバルたちは声のした方を見ると雪島がいた。

「あれ、雪島君いつの間にいたの？」

雪島がいつ来たのか誰も気づかなかったようでした。全員驚いていた。アオイは椅子から立ち上がり雪島に近づいた。

「どうしたの、遅かったね？」

「僕は学校があつたんだよ。時間は掛かるよ」

「君が雪島君だね。俺はサテラポリスの暁シドウだ」

雪島は「雪島宗助です・・・」と話したくないように簡単に言った。

「ところでさ。今来たばかりで何も知らないんだけど」

「あ、えっと。全部話していいかな？」

アオイはスバルたちに確認を取ると雪島に電波変換が出来ること、今起きていることを説明した。

「へへえ。君がロックマンだったんだ。事情は分かったけどそれ

ただでここに呼んだ分けないよね」

雪島はスバルに向かって関心したように言うと暁たちに聞いた。

「実はFM星人たちがリビルトって言う装置を作ってるみたいだな。その装置の解析を手伝ってほしいんだ」

「・・・なんで僕なんですか？ここに担当の人たちがいるでしょう」

「実はね、アドミストで盗まれたデーター回収を優先することになって、人手がたりなくなってるのよ」

ヨイリー博士が申し訳なさそうに言うツカサが言った。

「え、そうなんですか」

「だから、人為不足で解析が進まないから君に手伝ってもらいたいんだ。アオイと宵磨の話聞いたところいいと思うんだが、どうだ？やってくれるか？」

暁は雪島の顔をうかがいながら話した。だが、雪島はさっきと変わらず話したくないような様子だった。

「・・・それってサテラポリスのためってことですか？」

「一応そうなるが」

「なら手伝いません」

暁が答えると即答した。アオイ以外はまさか断るとは思わなかつ

たようで驚いていた。

「おい、雪島なんで断るんだよ。なんでサテラポリスに協力しないんだよ」

「それに、その言い方だとサテラポリスには協力したくないって言ってるもんだぞ」

「そう言っただけだ」

宵磨のあとにジャックが言うと雪島は冷たく言った。すると見ていたスバルが口を開いた。

「ねえ、なんでサテラポリスに協力してくれないの？」

スバルが言うと雪島の表情が変わり何も言わなくなった。雪島の今の印象は悪い方にしか向いてない。しかも暁やヨイリー博士は話すのが初めてなのでいい印象を持つことは出来ないようだ。誰もしやべらなくなり嫌な空気が辺りを包んだ。

「ねえ、やっぱりだめなの？」

「やっぱりって、どうゆうこと？」

雪島がアオイに聞くとスバルが言った。

「ねえ、だったら僕たちを手伝ってくれない？サテラポリスのためじゃなくて僕たちのために」

スバルの言葉に続くようにアオイも言った。

「そうだよ。私たちのために力を貸してくれない？」

アオイは真直ぐ雪島を見ながら言った。雪島はため息をつく。「信用はするなよ」と言ってヨイリー博士の方を向いた。

「あの、その装置のあるところに案内してくれませんか？」

「え、分かったわ」

ヨイリー博士と雪島は部屋を出て行きドアが閉まるのを見るとルナが言った。

「何なのよ彼！腹が立つわ」

「まったくですね。協力も断ってなにを考えてるんですかね」

「スバルもなんで協力してくれるように言ったんだ？」

「なんでだろ。サテラポリスに協力してほしいって言ったとき誰も信じてないような目をしてたから」

「似てるからね。スバル君に」

「どうゆうこと？」

アオイが言ったことが気になったらしくミソラが聞いた。アオイは自分が言ったことを後悔したように話そうか話すまいか考えた。アオイは「このことは雪島君には言わないでね」と念を押すと話し始めた。

「実は彼の父親ね三年前に突然いなくなったの。それで、学校でいじめを受けてね。一時学校に来なくなったときもあったわね」

「そうなの？」

スバルは宵磨の方を見る宵磨は「そんなこともあったな」と言っていた。

「雪島くんってスバル君に似てるね。ところで、雪島君が学校に来るようにしたのってアオイちゃんたち？」

ツカサはスバルと似た境遇の雪島に興味を持ったようだ。

「あの時が一番苦労したな」

「うん。探すのにも苦労したよね」

宵磨とアオイは雪島を学校に来させようとしたときのことを思い出しているように話した。

「ところで雪島君はどうしてサテラポリスを嫌ってるんですか？」

キザマロはアオイに聞くとアオイは表情を暗くした。

「あれ、もしかしてお前知ってるのか？あいつが断った理由」

アオイは表情を暗くしたままうなずいた。

「実はね。雪島君、父親がいなくなつた後、警察に探してもらっ

ように頼みに言ったらしいのよ。でも、「そんなことに取り合っている暇はないんだ」や「少しの間いなくなっただけだろ。すぐに戻ってくるさ」って言われて相手にされなかったみたいなの」

「それがサテラポリスを嫌う理由と何か関係あるのか」

暁も嫌われている理由が知りたいようであった。

「それから、一週間ぐらいあと警察じゃちが明かないから、サテラポリスに行ったのそしたら」

「・・・そこでも相手にされなかったか」

「うん。そんなことは警察に頼めばいいだろって言われたらしいよ。それでも、何度もサテラポリスに行ったけど同じことの繰り返しだったのよ。だから、民間人を守るはずの組織が一人も探してくれず正義を語ってるのが協力を断った理由だと思うよ」

アオイの説明が終わるとみんな押し黙っていた。雪島のサテラポリスを嫌う理由を知らなかったにしろ言い過ぎたと反省しているみたいだった。そんな中でミソラがアオイに聞いた。

「ねえ、雪島君の母親は？」

「・・・死んだらしいよ。事故死だったみたい。雪島君の父親がいなくなったのは母親の葬儀が終わった二日目ぐらい経った後らしいよ。捨てられたように突然に。だからよけいにね」

「母親が死んだすぐ後に父親が行方不明。捜索願いを出したが完全無視。サテラポリスを嫌いになるわけだね。後警察も」

アオイが雪島の母親のことを話した後、ツカサが静かに言った。

「アオイは何で雪島のことを知ってるんだ」

「雪島君を学校に来させるときに西村さんに聞いたの。だから、このことは言わないでね」

アオイが念を押すように言つとさらに暗い空気が部屋を包んだ。
アオイは「え、え」とあちこち見た。

「えつと、暗くなつたから気分変えて、事件や雪島君のこと以外の話しない？」

宵磨は「別の話つてな・・・」とぼやいていた。するとミソラは「あ、そうだった」と言つてポケットからチケットを出すとみんなに一枚ずつ配つた。

「これは？」

「来週ある私のライブのチケットだよ」

「あ、そつか。来週だつたんだよね」

「そうそう、アオイちゃん後これ」

ミソラはアオイにまたチケットを渡した。

「え、私もう持つてるけど」

「違うよ。雪島君に渡しておいて。予備を持ってきていてよかった」

ミソラは笑顔で言うとアオイは「ありがとう」と言った。

「さて、今日はもう解散だ。来てくれてありがとうな。気をつけて帰れよ」

暁はそう言うとスバル達は「さようなら」と言って部屋から出て行った。

「ジャック。お前は下にいるクインティアを手伝ってくれ」

ジャックは「またかよ」と言うと部屋から出て行った。暁はジャックが出て行くのを見ると大きなため息をつくと椅子に座った。ハインターからアシッドが出てきた。

「どうしたんですか？疲れがたまっていましたか？」

アシッドは暁に体調のことを聞くと暁は椅子にもたれかかると力をなくしたように言った。

「違う。いろいろあつてな」

「さっきのアオイさんの話ですか？」

アシッドはさっきのアオイが話していた雪島の過去のことを言った。暁は何も言わずただアシッドの言うことを聞いていた。

「・・・世の中はシドウ、あなたやスバルさんのような人ばかりで

はないことを知ってるはずですよ。このサテラポリスで働いている人たちも」

「どうやら暁は搜索願いを無視してきた自分たちサテラポリスのことを考えているようだった。」

「そんなことは分かってる。スバルのような正義感を持っている者ばかりが揃ってるのは奇跡だと思ってるよ。だがな・・・」

「今、考えていても仕方ないですよ。それより今は地球に来ているFM星人のことを考えましょう」

「それもそうだな」

暁は何かを振り切ったような顔になって言った。すると部屋のドアが開き長官が入ってきた。長官の近くには別の人がいた。

「・・・暁君。君に話があるんだが」

夜。倉庫のような暗いところにFM星人五体が集まっていた。

「で、データーは取ってきたが尻尾を巻いて逃げてきたんだな」

サイレントがリミスを馬鹿にするように笑いながら言った。リミスはサイレントを無視して黙っていた。すると、スウィフトが言った。

「なに戦っていないやつがいろいろ言ってるの」

「まあ、結果オーライってことでいいんじゃないの？それで、次は誰が行くの？」

「その前にリミスお前のパートナーにやってもらいたいことがあるんだが・・・」

リーダーがリミスに言うつとリミスは「やってもらいたいこと？」と言うつとリーダーは笑っていた。

理由（後書き）

どうやったらみなさんのように上手に書けるんでしょうか？

感想等よろしく願います

似たもの同士

リミスライトニングとの戦闘から一週間後。スバル達はオクダマスタジオに来ていた。

「それにしても、ここも久し振りだね」

「そうよね。前は事件があって大変だったけど今回はないでしょうね」

「あ、みんなこっち、こっち」

スバルたちが話しているとミソラがいつもの服装で近づいてきた。

「あれ、みんな来てるかと思ったけど、緋哉君と宵磨君、雪島君は？」

「緋哉君と宵磨君は用事があったみたいで、ライブ開始までには来るって。雪島君はリビルトの解析があるらしいけどすぐに来るらしいよ」

ツカサが三人がいない理由をミソラに説明した。ミソラは「そっか」と言った。

「そういや、宵磨のやつ用事があるとき多くねえか？」

「そういわれてみればそうですね。何かあるんでしょうか？」

ジャックが独り言のように言うとキザマロが同意するように言う

た。

「そういえばまだ言っ てなかったっけ」

「？アオイちゃん何か知ってるの」

ミソラがアオイに言っ とスバルたちに話し始めた。

「宵磨くんね、今、家の家計が苦しいようなの。それで、少しでも楽にさせようとしてバイトしているの」

「バ、バイト！？」

「そんなこと僕たちに言っ ていいの？」

ツカサがアオイに言っ と笑顔で言っ た。

「スバル君たちなら言わないでしょ」

「そうなんだ。じゃあ、私、練習があるからみんなは館内を見学してっ て」

ミソラはスバルたちに言っ とアオイは「私もついてっ ていい？」とミソラに聞くと許可をもらいミソラと一緒にオクダマスタジオの中に入っ ていっ た。

「私たちも中に入りましょ」

ルナが先頭でスバルたちも中に入っ ていっ た。

アオイはミソラについて楽屋に入ると中にある沢山の衣装などに夢中になった。

「うわー。こんな衣装があるんだ。あ、こっちのも可愛いな。こっちのもいいな」

ミソラは衣装に着替え鏡の前で髪を整えていた。アオイはミソラの近くにある椅子に座ってミソラを見ていた。

「ねえ、ミソラちゃんってスバル君のことが好きなの？」

アオイがミソラに爆弾発言をすると一瞬沈黙が部屋を包んだ。ミソラは顔を真っ赤にしなが髪を整えていた。

「ミ、ミソラちゃん。髪がグシャグシャになってるよ」

ミソラはグシャグシャになった髪を整えようとするとアオイがミソラのクシを持ち髪を整え始めた。ミソラはまだ顔が真っ赤だった。

「（アオイちゃんってこんなこと平気で聞いてきたっけ？）」

「で、どうなの？」

「／＼／＼え、えっと」

ミソラが途惑っているとノックが聞こえた。

「ミソラちゃん。そろそろ、練習始めるからよろしく」

ミソラが返事を見るとアオイは残念そうにため息をついた。

「あゝあ。いいところだったのに。ま、がんばってね」

ミソラは静かに頷いた。

ミソラとアオイが話しているとき、スバル達は・・・

「ミソラちゃんの最後のライブか」

「何だ？えらく残念そうだが？」

スバルは浦方に会い、ルナや照矢は案内をしてもらったが、スバルは屋上に行けるようになったことを浦方に聞き屋上に向かっていった。

「うん。ミソラちゃんはまた始めるって言ってたけど、なんかね・
」

「まあ、ミソラのやつが決めたことだからな。仕方ないんじゃないかねか？」

ウォーロックは続けて「俺は暇だから寝るわ。何かあったら起こしてくれ」と言い残すとハンターの中に戻っていった。スバルは屋上に出ると手すりに寄りかかり空を見上げた。しばらくは静かに空を見ていたが屋上のドアが開き、ドアのそばには雪島がいた。

「スバル君。どうしてここにいるの？」

「あれ、雪島君。来るの速かったんだね」

「うん。それにしてもこのウィザードって結構仕事熱心だね」

「？何かあったの」

雪島は苦笑しながら話し始めた。

「いや実は、アオイのやつライブに来ないかってメールが来たと思ったら、チケットや入館証が送られてきてないし、そのおかげで足止めをされて」

「じ、自分で誘つといて肝心な物を渡してないって」

スバルも苦笑しながら言った。雪島も手すりに寄りかかると町の方を見た。

「あ、あのさ雪島君・・・」

「どうしたのスバル君？」

雪島が聞いてきてもスバルはなかなか話を切り出せなかった。

「雪島君のお父さんって・・・」

雪島は静かにスバルをじっと見た。雪島はため息をつくともた町の方を見た。

「アオイからだろ。西村さんが話したって言ってたからね。二人

とも口が軽いと言つか。それがどうかした？」

「いや、ただ僕と似てるなと思って」

雪島は何も言わずただ静かにスバルの話を聞いていた。

「アオイちゃんに聞いたと思うけど、僕の父さんも行方不明になったときがあつてね。それで絆を作るのが怖くなって学校に行けなくなつたんだ。でも、委員長やみんなが僕をまた学校に行けるようにしてくれたんだ」

「・・・簡単に僕達は似たもの同士ってことかな？」

「多分ね。だからさ、その、何も出来ないと思うけど僕も雪島君の父さんを探すのを手伝うよ」

スバルが話し終わると雪島はドアの方へ歩き出した。ドアを開けると雪島は言った。

「ありがとう。気持ちだけ受け取っとくよ。君と話が来てよかった」

雪島はスバルに伝えるとドアを閉めた。が、すぐに開いた。

「あ、そうそう。伝えることが二つ。リビルトの解析結果が終わったからヨイリー博士の方からメールが届いているはずだよ」

スバルはハンターを見ると確かにヨイリー博士からメールが来ていた。

「（・・・ウォーロック、メールの管理ぐらいしてよ）」

「それとアオイちゃんとミソラちゃんからの伝言。歌の練習がもうすぐ始まるから速く来てだって。僕は先にいつてるね」

雪島は「練習は特設ステージであるらしいよ」と付け足して言う
と館内に降りていった。

「え、ちょ、ちょっと。先にそうゆうことを教えてよ」

スバルはそういうと屋上から降りていった。

スバルが特設ステージに来ると練習が始まっていて浦方や監督をはじめルナや竜牙達全員がいた。

「スバル君、遅いわよ」

「ごめん。あれ、竜牙いつ来たの？」

「ついさっき。それにしても、忘れてちゃいけないだろ」

スバルは謝ると「謝るならミソラちゃんに謝れば？」と言われた。
スバルはステージの方を見るとスバルが来たことに気がついたように
で笑顔で歌っているミソラがいた。

「それにしても、本当に歌上手だね。ミソラちゃんは。何だか嫌
なことを全部忘るような気がするよ」

「照矢君もそう思う？」

ミソラの歌を聞いていると照矢がスバルに言った。

「まえにあったここでのライブはディーラーって組織が妨害したけどうまくいったんでしょ」

「うん。けど、今度はそんなことはないと思うよ」

「そうだね」

スバルは元気に歌っているミソラを見ながら言った。

スタジオにいる誰もが何もなくうまくいくと思っていた。潜む陰に気づかずに。

「響ミソラのライブね」

オクダマスタジオの並木道。黒い服にジーンズを穿いた青年が興味のなさそうにチケットを見ていた。近くにはさそりに似た紫色のウィザードがいた。ウィザードは低い声でコーヴァスのように笑っていた。

「で、そのロックマンってのはどのどいつなんだ。サイレント？」

サイレント。青年はウィザードのことをそう呼んだ。サイレントはまだ笑いながら言った。

「話を聞く限り、餓鬼のようだぜ。確か名前は星河スバルだった

かな」

青年は「ふうん」と期待はずれのようにすで言つとチケットを捨てた。すると、ニヤツと笑つて静かに言つた。その声はさっきと別人のような冷たく低い声で言つた。

「子どもか。ハハハ、楽しめるだろうな？」

「地球のやつらが、英雄だと言つてゐるんだ、楽しめるだろう。血祭りにあげてやろうぜ西杉」

西杉と呼ばれた青年はポケットから鍵の形をしたものを取り出すと言つた。

「それにしてもだ。ライブで沢山人が来るのに殺さずお前らが好きな負の心とかゆうのを集めるとは面倒なこつたな」

鍵の形をしたものを仕舞うと館内へ歩いていった。

似たもの同士（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

乱闘

・オクダマスタジオ 特設ステージ ー

「よし。上出来だ。本番もこの調子でがんばってくれよ」

監督はミソラにそう言うと言館内へ戻って行った。ミソラは練習で疲れたのかその場に座った。そんなミソラに浦方が飲み物やタオルを持っていった。

「お疲れさん。うまくいったよ。本番もがんばってな」

「はい。ありがとうございます」

ミソラはお礼を言うと言受け取った。スバルたちもミソラの方へ行った。

「ミソラちゃんとてもよかったですよ」

「さすがミソラちゃんだぜ」

キザマロとゴンタは絶賛しまくっていた。スバルは浦方に挨拶した。

「お久しぶりです。浦方さん」

「あ、スバルじゃないか。久しぶりだな」

「スバル君」

浦方と話しているとミソラが呼んだ。

「どうだった？うまくいった？」

「うん。上手だったよ」

スバルに褒められたミソラはともうれしそうな顔になった。

「よし、ミソラは本番までまだあるから衣装を着替えてきてい
ぜ」

浦方に返事すると楽屋に戻っていった。

「じゃあ、スバル。俺も仕事に戻るからライブまで中にいてい
かな」

浦方はそう言い残すと館内へ入っていった。

「なあ、飲み物を買に行かねえか？」

「もう。練習なのにあんなに声を出すからよ」

ルナはゴンタが言ったことに呆れながらいった。照矢と竜牙の二
人は中を見て周るよう一緒に入っていった。ルナ、キザマロ、ゴ
ンタとなぜかジャックは飲み物を買に行くのに自動販売機を探し
に言った。アオイは雪島をつれてどこかに行った。

「さて、外にでも行こうかな」

スバルは外の並木道に向かった。

スバルが外に出ると近くから怒鳴り声が聞こえた。

「てめえ！今なんていいやがった！？もういつペン行ってみるよ」

声が聞こえた方を見るといかにも不良っぽい男の人が青年に突っ掛かっていた。青年は平然とした表情のまま怒鳴ってきた男に言った。

「当たっただけで金を払えとか言う馬鹿に渡す金はないね。さっさと消えたら？」

「言わせておけば！」

男が殴りかかろうとしたとき青年の表情が一変した。スバルはその表情を見たとき恐怖した。相手が誰であろうと容赦なしに叩き潰す。相手が動かなくなるまで。そんな、冷酷な目つきに変わった。そのとき、警備ウィザードが来た。

「あなた達何をしてるんですか！？今すぐに止めなさい」

男は殴るのを止め舌打ちするところかに行ってしまった。スバルは青年の方を見るとあれ？と思った。

「（目つきが元に戻ってる？）」

スバルは目を見ただけで恐怖した青年目つきが一瞬で変わったことに驚いているようだ。警備ウィザードは事情を青年に聞こうとし

たとき無視して怒鳴った男と同じくオクダマスタジオから出て行った。

「（あの人何者だったんだろ・・・）」

スバルが考えていると後ろから名前を呼ばれた。振りむくというもの。ピンクの服を着たミソラがいた。

「何か騒ぎがあったみたいだけど、大丈夫だった？」

「うん。大丈夫だったよ」

「よかった。じゃあさ、ライブが始まるまでさ一緒にいろいろな所見て周らない？少し工事したらしくて前来たときなかった場所があるからさ」

「いいけど」

「じゃ、行こう」

ミソラはスバルの手を握ると駆け出した。スバルは「ちょ、ちょっと」と言いながら引きずられるように行った。

- 裏道 -

オクダマスタジオで騒ぎを起こした男が仲間らしい二人の男の近くに行った。

「おう、遅かったな。菓子でも買いに行くとか言っておいて何かあったのか？」

男の一人はタバコを吸いながら言った。

「どこのやろうはしらねえが一回ぶん殴ってやろうかと思ったけどよ、邪魔がはいっちまって殴れなかったぜ」

「だったら、今から俺たちもついて行ってボコボコにして金でも脅し取るか？」

もう一人の男はゲームをやめて面白そうな顔で言った。

「お、面白いこと言うね。そいつの泣き顔で謝罪している姿を見るのは面白そうだな」

三人は笑いながら「違いねえ」と言った。そんな笑い声が響く裏道で誰かの歩く音がこだました。三人の前には話しに出てきた青年が立っていた。

「お、こっちから出向く必要がなくなっただな」

三人の不良は笑いながら青年の周りを囲んだ。

「ここなら、目撃者なし。止められる必要なし」

青年はそういうと不良の一人が言った。

「おい、兄ちゃん。こんなところに何のようかね？もしかして俺たちにお金をくれるとかかな？」

すると不良全員が笑い出した。青年の表情はスバルが恐怖を覚えた表情になって静かに楽しそうに言った。

「せめて、時間まではがんばって足掻いてくれよ」

言うのが早いか青年は笑っていた不良一人に殴りかかった。青年のストリートは腹にクリティカルヒットしたらしく笑うのをやめてうずくまった。残りの不良たちは声を上げると青年に襲い掛かった。青年は冷酷に楽しそうな目で殴りかかった。

・オクダマスタジオ

「あ、ミソラちゃん。そろそろ準備に行ったほうがいいんじゃないの？」

スバルとミソラはオクダマスタジオの屋上にいた。スバルは言う
とミソラは残念そうな顔になったが、「絶対、最後まで見てよ」と
言うのと楽屋に走っていった。スバルは「もちろんだよ」と楽屋に向
かって走っていくミソラに行った。ドアが閉まるとスバルは夕日の
沈む町の方を見た。しばらくすると寝ていたウォーロックがハンタ
ーから出てきた。

「あーよく寝たぜ」

「おはよウォーロック」

「お、もうこんな時間なのか？スバルそろそろ下に降りてツカサ

たちと合流した方がいいんじゃないのか？」

入り口の方を見るとライブを見に来た人たちが並んでいた。

「うん、そうだね」

スバルはウォーロックに言うと下に降りていった。

- 裏道 -

スバルがみんなと合流するのに屋上から降りた頃。

夕日が沈み始めて回りはなんとか見えるほどの暗さになっていた。近くには影が二つ積み上げられるように倒れていた。近くからは人が謝っている声が聞こえるか聞こえないぐらいの小ささで誰かが言っていた。

「おい、立ちなよ。もうすごしあがいてくれよ。楽しみが終わっちまうじゃないか」

どうやら青年が三人の不良と乱闘した結果不良たちが負けたようだ。いや、状況を見ると弱いものいじめを不良たちがやられていたと言った方がいいようだった。つまれていた二人は顔がはれ上がっていてとても立つことが出来る状態ではなく気絶していた。

青年は残りの不良の胸倉を掴んで面白そうなようすで言っていた。不良に関しては死んだような顔で涙の後が残っていた。青年は舌打ちをすると投げ飛ばし腹を何度も蹴った。

何度か蹴ると青年のハンターからウィザードが出てきた。

「おい、西杉。時間だそろそろやめろ。仕掛けが出来なくなつまう」

不良を蹴っていた青年、西杉は舌打ちをすると手を放した。掴まれた不良は力なく倒れた。そんな状況を見向きもしないで歩き出した。

ライブが行われるオクダマスタジオへ。

ライブ開始

ーオクダマスタジオ 特設ステージ -

スバルはあれから無事にツカサ、ルナたちと合流した。スバルが行くと宵磨が来ていた。それから楽しく話しながら会場へ向かった。特設ステージは、前回ステージの場所を高くしたため対処が出来なかったため、今回のステージは高いところではしないようだ。

「それにしても予想以上に人が多いね」

ツカサが周りを見渡して言った。辺りはすでにミソラファンの人たちで埋まっていた。ついでに、スバルたちの席は当然最前列だ。

「多すぎだろう。隣は隣で煩いのがいるし」

ジャックは隣で叫んでいるゴンタとキザマロを見ながら呆れたように言った。

「ちよつと、ジャック。うるさいよ」

「ちよつと待て！なんで俺なんだ！？普通俺の隣だろ！」

平然と言ったアオイにジャックは言う「なんとなく」とさっさと言った。スバル達は苦笑しながらそのやり取りを見ていた。

「けどライブが始まってここにいる全員が叫び始めたらやたらうるさいような」

宵磨が言つとゴンタとキザマロが同時に「うるさいとは何ですか！？うるさいとわ」と詰め寄るように言った。宵磨は「悪かった、悪かった」と言っていた。すると辺りを照らしていた電灯が全部消えた。一瞬間が支配したがスポットライトが舞台を照らすと笑顔のミソラがいた。

ミソラがいるのを見た観客は一気に歓声を上げ会場はあつという間に歓声に包まれた。ミソラは手を振るとマイクを持っていた。

「みんなこんばんわ。今日は私のライブに来てくれてありがとう。知ってる人もいると思うけど今日のこのライブが終わったら私は引退します。けど、必ずまた戻ってきます。そんな訳で今日はいつも以上に盛り上げていくよ」

ミソラが引退と言ったとき歓声とは別に残念そうな声も聞こえたと言い終わると歌が始まってないのにさらに歓声が強くなった。

「じゃあ、早速一曲目いきます。今日初めの曲は『ハートウエーブ』いくよ」

ミソラがギターを構えると歌いだした。始まると共に歓声も強くなった。スバルたちはゴンタ、キザマロ、さらにアオイとルナまで夢中に応援していた。

「引退ライブか・・・」

スポットライトが辺りを照らしているところとは逆の暗いところで青年、西杉がこれから起こる楽しい出来事を待ち望む子供のようにな不気味な表情で言った。

「くくく・・・その歓声が悲鳴に変えるのが楽しみだぜ」

「おい、西杉。準備が出来たぞ。速くいかねえか？」

西杉はうなずくと裏の方に歩いていった。

一曲目のハートウェーブが終わり観客の歓声がさらに大きくなっていた。ジャックはあまりにもついていけず外に出たようだ。

「みんなーまだいける？」

ミソラが元気に聞くと答えるように「おー」と歓声が上がった。

「じゃあ、二曲目『絆ウェーブ』いくよー」

ギターを弾きだし二曲目に入った。二曲目の中間ぐらいまで来るとスバルは自分のハンターがなっているのに気がついた。どうやらメールが届いていたみたいだった。差出人は不明で、前アドミストで送られてきたのとそっくりなのが来ていた。

スバルはいいところなのだと思いますながらメールを小さな声で読んだ。

「えつと・・・『会場の裏。速く行かないと後悔することになるぞ』って、え？」

メールの内容に驚いたスバルは行こうとしたが、歌っているミソラを見た。スバルは「ごめん。少し席をはずすね」とささやくよう

に言つと会場を出た。

スバルが会場から出たことに気づいたらしくウォーロックが来た。

「おい、どうした？最後までいるんじゃないかったのか？」

スバルはウォーロックにメールを見せるとウォーロックは「なるほどな」と言いながらうなずいた。

「ガセかもしれないぜ？本当だったとしても何があるのか分からないが行くんだろ？」

「うん。せつかくのライブを邪魔されたらたまらないからね」

スバルは指定された場所へ走って行った。

「はあ。おいおい、警備のやつが一人もいないってどうゆうことだよ？」

西杉はおいてある装置を見ながらつまらなそうに言った。

「まあ、いいんじゃないか？それより、速く始めないか？」

サイレントは不気味な笑みを浮かべていった。

「おし。じゃあ早速この会場を爆発・・・」

西杉が言いかけたとき近くの林から子供の声が聞こえた。

「ねえ、ウォーロックこの辺りだよな？」

「ああ、けどなにもないな」

スバルたちが道に出ると西杉と目が合った。スバルは西杉の姿を確認すると「あれ、たしかあのときの」と言ったとき隣にいたサイレントに気がついた。ウォーロックはスバルに耳打ちをした。

「おい、スバル。どうやら当たりみたいだぜ。あいつさそり座のサイレントだ」

「つてことはFM星人？」

スバルはウォーロックに確認を取ると西杉を見た。

「おい、誰だお前？こんなところに何かようか？」

喧嘩を売りそうな声でスバルに言った。

「ハハハ、ちょうどいいところに来たな。ウォーロック。おい、西杉こいつらがあのロックマンだ」

西杉はその一言を聞くと笑みを浮かべた。

「このライブ会場を爆破する前にお前を倒すか」

「ば、爆破って・・・」

西杉は近くにあった装置を手で叩きながら言った。

「この装置のスイッチを押すとこのライブ会場に仕込んだ爆弾がドン！中にいる人が混乱している中にさらに岩を落したり大混乱させ、湧き出る負のエネルギーをこいつが吸収・・・」

「おいおい。しゃべりすぎだろう。それ以上しゃべるな」

サイレントは西杉が計画をペラペラ話し鍵の形をしたものを出したときにストップをかけた。

「それは・・・アンドロメダの鍵!？」

「出来上がるのが速くねえか？」

「話はここまで。さあて、始めようかね」

西杉はスバルたちを無視して装置のスイッチを押そうとした。

「！！スバルあれを押されたら」

「分かってる。電波変換」

スバルはロックマンの姿に変わると西杉を止めようと周波数変換で近づいた。西杉はいきなりスバルの方に向き直った。その顔は予想通りといわんばかりのようすで笑っていた。

「やっぱりそう来るよな。さっき言ったはずだぜ？先にお前を倒すってな！電波変換」

スバルは突然の行動に距離を取った。西杉の姿は、黒い身体に紫色のアーマを着けていた。両手には短剣を持っていた。

「この姿はクレイムサイレント。さあ、始めようぜ！」

「来るぞスバル！」

「うん。ウェーブバトル！ライド・オン」

スバルが戦闘を始めたころ。

「さあ、飛ばしていくよ」

ライブの盛り上がりは落ちることなく活気に溢れていた。照矢は疲れたように外に出ようとした。

「あれ、どうしたの照矢君？」

「ちょっと外の空気吸ってくる」

照矢はツカサに言うのと外に出て行った。ルナやゴンタアオイたちはもちろん気がついてない。

照矢は外に出ると大きく息を吸った。ハンターからはディムネスが出てきていた。

「大丈夫ですか？まだ、体調はよくないんでしょう？」

「ハハハ・そんなだけだね。なんか夢中になっちゃって。いろいろな事忘れてさ。それと、敬語はやめてくれウィザードなんだからさ」

照矢はそう言うのとまた深呼吸をした。ふと近くにあったベンチを見ると誰かが寝ているのが見えた。照矢は目を凝らしてみるとどうやらジャックのようだった。

「あれ、こんなところで何してるの？ジャック」

ジャックは手をどけ照矢の姿を確認すると起き上がった。

「お前こそどうした？ライブ終わったのか？」

「まだ終わってないよ。僕はちょっと外の空気が吸いたくなってるね」

「俺は寝てた。終わるまでここにいてるつもりだから終わったら起こしてくれ」

ジャックはそう言うのとまた寝だした。照矢「分かったよ」と言う。デймネスに「飲み物買いに行かない？」と言うと歩き出した。

「で、わざわざ何でこんなところに来るのかな？」

デймネスは呆れながら言った。今、照矢達は人影がない準備室近くのところに来ていた。

「別にいいだろ。表の方はいいのがなかったんだから」

照矢はそう言いながら紅茶を買った。買った紅茶を飲むとため息をついた。

「大体考えてることは分かるけど、スバルたちにも手伝ってもらった方がいいのでわ？」

「本当に敬語やめてよ。まあ考えてみるよ。・・・あれ？」

照矢は飲み終わったペットボトルを近くにあったゴミ箱に捨てようとしたとき何かが入ってる紙袋を見つけた。

「これなんだろ？忘れ物かな？」

照矢は紙袋を持ってデймネスに聞いた。デймネスは「さあ」と言うと紙袋の中を見た。照矢は勝手に見るデймネスを止めようとしたがいきなりデймネスに「紙袋をそつと置いて」と言われた。照矢は言われたとおりにするとデймネスに聞いた。

「どうしたの急に？」

デймネスは紙袋の中を見せた。照矢はそれを見ると驚いた。その中にはパネルが液体の入った容器とコードのようなものでつながっている装置が入っていた。パネルには5:00と浮かんでいた。

「ねえ、これってもしかして・・・」

「多分考えているものであっていると思います。うかつに触らないでくださいね。本物のようですから」

「解体できる?」

「この程度ならすぐに出来ます。ただ、オクダマスタジオのいたるところにありますね」

ディムネスは装置を取り出し解体しながら言った。

「どれくらいあるの?」

「10数個ですね。連動式のようですから場所はすでに分かっています」

「今はライブ中だし止めるのもなんかな。何とかしてみるか」

ディムネスは「終わりました」というと照矢は残りの場所を聞くと走っていった。

ファイナライズ 失敗？

スバルは西杉が電波変換した姿、クレイムサイレントと戦っていた。戦況はスバルの方が押されていた。

「おらおら、その程度なのか!？」

スバルは西杉の短剣での連続攻撃をロングソードで防いでいた。

「（この人暁さんと同じぐらい速い。それに・・・体が重い）」

西杉はスバルを弾き飛ばすと追撃を加えてきた。スバルはとっさに防御チップのバリアで防いだ。お互いがウェーブロードに立つとウォーロックがスバルに言った。

「おい、スバルどうした？このままだと負けるぞ!？」

「分かってるけど・・・」

スバルがウォーロックに言うと西杉が笑い出した。

「ハハハ、体がうまく動かないんだろ？そりゃそうだ、お前の周りの電波を悪くしてんだから」

「おいてめえ！卑怯だぞ。それに、スバルの周りの電波が悪けりやお前らの動きも鈍ってるはずだろう」

ウォーロックは笑ってる西杉に怒鳴った。西杉は表情を変えずに言った。

「何寝ぼけたこと言っただけ？その装置に対応できるプログラムを組み込んでおけばいい話だろ」

西杉の話を聞くと「卑怯なやつめ」と吐き捨てるように言った。スバルは苦しそうなようすだった。西杉は笑うのをやめると短剣を回した。

「弱いものいじめってのは何もしてこないやつを思う存分殴ったりするんだぜ？弱らせたりするのは当たり前だろ」

西杉は短剣をまわすのを止めるとスバルの方に向けた。

「さて、どこまで楽しめるかな」

西杉はそういふなり周波数変換でスバルの目の前に移動した。スバルはバトルチップは間に合わない判断し距離を取ろうとした。

「無双連斬」

西杉は一瞬でスバルの後ろに立っていた。スバルは驚いて振り向いたとき体中に激痛が走った。バイザーが割れていて肩や手など切り傷が出来ていて血が出ていた。

スバルは一瞬倒れかけたがなんとか持ちこたえ距離を取った。今度はさっきより遠く。スバルの息は荒く血が片目に入った。

「おいスバル、大丈夫か？」

「な、何とか・・・」

スバルは西杉の方を見ると楽しそうに短剣を回していた。隣にはサイレントが出ていた。

「リミスと俺らは違うぜ。容赦する気はねえぜ」

「次はどこを切り刻んでやろうか？」

西杉は不気味な笑みを浮かべながら次のことを考えていた。スバルはサイレント達に聞こえないようにウォーロックに聞いた。

「ノイズはどれくらい溜まってる？」

「200%超えてるぞ、やるか？」

「それしかいい方法が思いつかないからね」

スバルは立ち上がると西杉の方を見た。西杉は短剣を回すのを止め構えた。

「ファイナライズ！」

スバルはそう叫ぶとノイズがスバルを包み込む……はずだった。

「あれ？」

スバルの姿は変わらずノイズもスバルを包み込まなかった。西杉は呆気に取られていたが笑い出した。

「何だよ。『ファイナライズ』って叫ぶもんだから何が起こるか

と思えば。失敗か？それは残念だったな」

「どうして・・・」

スバルはなぜファイナライズが出来なかったのか考えていた。そのため、西杉が近づいていることに気がつかなかった。

「まだ、終わってもないのに敵から目をそらして言い分けないだろ！」

西杉の声でスバルは我に返ると西杉は目の前に来ていた。

「簡単にやらせるかよ。ビーストスイング！」

西杉がスバルを斬ろうとしたときウォーロックが自慢の爪で攻撃した。西杉は突然のことで防御が間に合わずまともにくらった。

「スバル考えるのは後にしろ！」

スバルは頷くと次の攻撃に備えた。西杉は立ち上がると表情が昼間の冷酷な顔になっていた。

「くそが。何も出来ないやつが攻撃しやがって」

西杉はサイレントを呼ぶとサイレントは「やっと俺も戦えるのか」と言った。

スバルを睨むと短剣で斬りかかった。ウォーロックはさっきと同じように決めてやるうかと構えていたがサイレントが西杉の上から飛び掛った。ウェーロックはそのままめ合いに入った。

「くそ、どきやがれ」

「ここでゆっくり見てなよ」

「（僕を切るためには最低体に触れなければならないはず。だったら）」

スバルは一枚のバトルチップを使った。

「ハリケーンダンス」

スバルはその場で風を纏いながら回転し始めた。

「よし、これなら切ることはできねえだろ」

「そうだな。回転している間わな」

サイレントは静かに言うとうォーロックは「なに？」と言った。スバルの回転は徐々に弱まっていき止まった。スバルは片目で前を確認すると笑みを浮かべていた西杉が立っていた。スバルは驚いてバトルチップを使おうとしたが遅かった。西杉の姿はもうなく気がついた時には痛みと衝撃で倒れた。

「フェイントをかけてなかったら俺がやられてたが、まあいいや」

西杉はそんなことを言いながら体から血が出ているスバルに歩いて行った。

「（くそ、立たなきゃいけないのに体が動かない）」

「子供でも知ってることを教えてやるよ。サソリには毒があるんだぜ？」

西杉はスバルを見下ろしながら冷たく言った。

「くそ！毒か」

「気づくのが遅かったな。あの短剣に毒が塗ってあるぜ。もうあのガキは動けないぜ」

ウォーロックが言ったことにサイレントとは馬鹿にするように言った。ウォーロックは「くそがー」と叫ぶとスバルの方へ向かおうとしたがサイレントが邪魔をした。

「さっきのお返しだ」

西杉は今までの攻撃や電波の悪さ、サイレントの毒で動けないスバルを蹴飛ばした。スバルは地面に何度か体をぶつけた。西杉はスバルの方へと歩いていった。

「おら、どうした？もう終わりか？」

西杉はスバルの背中を踏みつけた後、何度も腹を蹴った。ウォーロックは助けに行こうとしたがサイレントに押さえつけられて助けに行くことが出来ない。

スバルは蹴られるたびに呻き声を出した。西杉はそんなスバルにお構いなしに何度も蹴った。

「やっぱり、弱いものいじめはこうでないとね」

西杉は蹴るのを止めるとスバルの首を持つと投げ飛ばした。スバルはウォーロックの近くまで投げられた。ウォーロックはスバルの近くに駆け寄るとバトルチップの中ならリカバリーを使おうとした。

「あ、リカバリー使っんなら使えば？どうなっても知らないけど」
「どうゆうことだ？」

ウォーロックは恐ろしい形相で言った。サイレントは笑みを浮かべながら言った。

「ドクリンゴってバトルカード知ってるか？」

ウォーロックはそれを聞くなりリカバリーを使うのをやめ舌打ちをした。

ドクリンゴは体力を回復するバトルチップ、リカバリーなどを逆にダメージを与える効果に変えるバトルカード。この場合、リカバリーを使うと傷を治すのではなく逆にスバルをさらに苦しめることになる。

「さて、そろそろ爆破しますか」

西杉は装置のボタンを押すため近づいていった。ウォーロックは「止める！」と叫ぶなり襲い掛かった。ウォーロックの攻撃はサイレントによって簡単に弾き飛ばされた。

それを見ると西杉は装置のボタンを押した。

スバルは気を失いそうな様子でボタンを押した西杉の姿を見た。スバルとウォーロックは「しまった」と思っていたがどうにもならなかった。西杉とサイレントは騒ぎになるのを今かと待ち望むような様子で館内の方を見た。が、騒ぎになるところか爆弾が爆発した

音すら聞こえなかった。

「おい、どうゆうことだ？騒ぎが起ころどころか爆発さえしないじゃないか」

「知るかそんなの！」

西杉とサイレントは言い争いをしていた。

「くそ！ちゃんと爆弾は仕掛けたはずなんだが」

「こうなったら、あいつをボコボコにしてやる」

西杉はスバルの方を見ると歩いてきた。スバルは立ち上がろうとするが体が動かず声しか出せない。

ウォーロックはスバルを守るように前に出た。西杉とサイレントは冷酷な笑みを浮かべながら歩くのを止めない。スバルとウォーロックが諦めかけたとき空気を切るような音が聞こえたと思うと西杉の肩に矢が刺さっていた。

西杉は突然の攻撃をくらい矢が刺さってる方の方を抑えた。サイレントが矢を抜くと西杉は矢の飛んできた方を見た。

「誰だ！？どこにいる！？出て来い」

西杉が叫ぶと後ろから矢が二本飛んできた。今度は一本は切るこゝとが出来たがもう一本は足をかすった。西杉は見えない敵に腹を立て始めていた。

「西杉、下じゃない上だ！」

サイレントが言った方を見ると空には星と一緒に無数の羽があり襲い掛かった。

「っち！」

西杉はバックステップでかわすと辺りには無数の羽が地面に刺さっていた。西杉が顔を上げるとスバルの近くに翼をはやし弓を持った灰色の電波体がウェーブロードから降りてきた。

ファイナライズ 失敗？（後書き）

最後に現れた灰色の電波体が誰なのかは分かりますよね？

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

空の狩り人

スバルは自分のそばに電波体が降りてきたのを見ると気を失った。ウォーロックはそばに立っている灰色の電波体に隙を見せないように構えていた。が、ハンターから出てきたウィザードを見ると警戒心が解けた。

「デймネスお前か」

「二人とも大丈夫ですか？」

「気を失ってるだけだね。デймネス、スバル君とウォーロックをお願い」

照矢はスバルが無事なことを確認すると奥のほうで獲物を狙っているような顔つきをした西杉を見た。西杉は恐ろしく不気味な気を放っていた。照矢にはそれが西村を包み込んでいるように見えたが、動揺はしなかった。

「・・・おい、てめえ何者だ？」

「サテラポリス遊撃隊。スカイデймネス」

お互い相手の動きを見ながら静かに言った。

「まさかと思うが、お前が爆弾を壊したのか？」

「飲み物を買に行ったら物騒なものを見つけたんでね。悪いけど全部使い物にならなくしたよ」

「俺の楽しみを全部無駄にしやがって！」

照矢の話を聞くなりさっきの冷酷な顔と違い怒りの形相になって、怒鳴った。西杉は短剣を構えるなり襲い掛かった。スカイデймネス、照矢はスバルを担ぎ離れたところへ周波数変換で移動した。

「デймネス。バリアをはってて」

照矢はそういうと空へ跳んだ。デймネスは言われたとおりバリアをはった。

照矢空へ飛ぶと暗くなった林を見まわした。一瞬静けさが辺りを包み込むと何かを感じたのか照矢は後ろを見た。そこには周波数変換で近づいてきている西杉がいた。

「実戦は始めてなのに全力で来られてもな」

「だったらお前もあそこで倒れているやつの二の舞にさせてやるぜ」

照矢は距離を取ろうとバックステップをしたとき、西杉はいなくなっていた。

「・・・！」

照矢は突然、周波数変換で違うウェーブロードへ移動した。移動したとき照矢の肩にかすれ傷が付いていた。西杉はさっきまで照矢がいたところに立っていた。隣にはハンターから出てきたサイレントもいた。

「今のをかわすか」

「っち。運のいいやつだ。次ははずさねえぞ」

サイレントはやるなと思っていたが、西杉はともかく気が晴れるまで叩き潰すことしか考えてないようだ。

「（速いな。今のはあいつの言うとおり殺気だけでうまくかわせたもんだからな）」

照矢は立ち上がりながら勝つための作戦を考えていた。

「（こっちは初めての戦闘。まともにやって勝てる相手ではないな。さて、どうしようかな・・・）」

照矢はデймネスの方を見ると何か言いたげな様子だった。しかし、デймネスを見たのがあだになり西杉が向かってきていた。

「よそ見してると終わりだぜ」

照矢は落ち着いた様子で弓の弦を伸ばしたすると薄緑色の矢が出ていた。

「ウィンドシュート」

弦を離すと風を纏った矢が西杉に飛んでいった。西杉は鼻で笑うと走りながら軽々とよけた。

照矢は次の矢を放つため弦を引いたが西杉のほうが少し速かった。

「今度こそ終わりだ。無双連斬！」

照矢は構えたまま周波数変換で上のウェーブロードに移動した。かすり傷が数箇所あったがたいしたことはなさそうだった。

照矢は移動するなり矢を放った。西杉は上からの攻撃に反応が遅れたがなんとかかわした。

「この程度の攻撃じゃあ、勝てないぜ」

西杉は挑発も含めたような言い方で言った。西杉はそのまま照矢に向かっていった。今度は突っ込んで技を放たずスバルの時と同じようにフェイントをかけた。照矢はバックステップでかわしたことが失敗だと言うことに気がついた時は西杉は攻撃の構えをしていた。

「今度こそ終わりだ！無双連」

西杉が言いかけたとき肩を何かが貫いた。西杉は何が起こったか理解できてない様子だったがサイレントの叫び声が入った。

「上だ！よける」

動くよりも早く突き飛ばされた感覚を感じた。西杉はさっきまでいたところを見ると切り刻まれた跡みたいなのがあり、薄緑の矢が刺さっていた。西杉は肩の方を見ると地面に刺さっていたのと同じ矢が刺さっていた。

「これは、あいつがあの時放った矢か？」

西杉は矢を不器用に抜きながら聞いた。サイレントはバリアを張っているディムネスの方を見た。

「まさか、あのデймネスか。っち、甘く見るんじゃないかった。おい西杉、あいつの矢はかわすんじゃないく消さなきゃいつまでも追ってくるぞ」

「・・・矢を操る能力か」

西杉は照矢を睨みながら言った。照矢は表情を変えず弓の弦を引いていた。

「気づかれるの速いな。・・・ちよつとやってみようかな」

照矢はそういうと西杉の視界から消えた。

「炎双斬撃」

西杉はそう言うなり短剣は炎を吹いた。短剣が炎を纏うなり後ろに振った。何をやってるんだとウォーロックは思ったが、何かが炎に包まれた。西杉が見ている先には照矢がいた。

「あいつ見向きもしないで矢を切ったのか」

「ちよつとやばいかな？」

デймネスが心配そうに言う「ちよつと行ってくるから後よろしく」と言い残し照矢の方へ向かった。照矢は周波数を連続で使いそのつど矢を放っているようだ。照矢は周波数変換でどこかに移動すると今度は西杉の全方位から矢が襲い掛かった。

西杉は笑みを浮かべると矢を全で一瞬で切った。矢は炎に包まれると地面に落ちながら消えていった。

「おい！もう終わりなのか？」

西杉は辺りを見渡しながら言った。

「（あれで無傷か。早くスバルを病院に連れて行きたいんだけどな）」

照矢は木に隠れながらあれこれ考えているとディムネスが来ていた。余計な話は省くよううでいきなり本題に入った。

「矢は私が操るんで操作に気をとられなくていいですよ」

「じゃ、任せる」

照矢はウェーブロードに立っている西杉に向かって無数の矢を放った。

「！来たか」

西杉が見た方には無数の矢が向かってきていた。

「おい、また矢かよ。本人が出てこいよ」

つまらなさそうに言うつと短剣を構えた。矢にタイミングを合わせると今度は炎に包まれなかった。矢は急に方向を変え八方に飛び散った。西杉はどうゆうことだと疑問に思い飛んでいった矢を見ると向きをまた西杉の方に変えた。今度は直線的ではなく意思を持ったように向かってきた。

「くそ！なんだよ。急に切れなくなった」

西杉は短剣を振りまわしながら襲い掛かってくる矢をかわした。致命的なダメージは与えてないがかすり傷がどんどん増えていった。そんな中、西杉は足に矢がまともに当たってしまった倒れた。このチャンスを見過ごすまいと矢が一斉に襲い掛かった。西杉は舌打ちすると周波数変換でかわした。見つからないように地面に移動したのがつかの間、照矢の声が聞こえた。

「決まってくれ。ウィンドストライク！」

上を見るとさっきの矢と比べ物にならない数の羽が向かってきていた。

矢の攻撃を受けたばかりで対処に間に合わず全ての羽が襲いかかった。西杉がいたところは砂煙に包まれていた。

照矢とデймネスはスバルの近くに降りるとウォーロックに容体を聞いた。スバルはすでに電波変換は解けていてもとの姿に戻っていた。

「止血はした。それよりお前らもやるな。そういえばデймミスは俺が地球に来る前は『空の狩り人』だったか」

「昔の話はまた今度で。それよりスバルさんを速く治療した方が」

「この時間だとこの辺りの病院は無理だと思うから、やっぱりWAXAだね」

デймネスとウォーロックがスバルを抱えると照矢は砂煙のあがっているところを見た。砂煙は晴れていてそこには羽が刺さったド

ーム状の壁があった。

照矢たちは再び警戒すると壁はバラバラに砕けた。中からは不機嫌な表情をした西杉とサイレントがいた。

「はい、そこまでー」

サイレントたちが出てくるとウェーブロードの方から声が聞こえた。照矢たちは声のした方を見るとそこにはアドミストのときに来たスウィフトがいた。

「おい！何でまたお前が来てるんだ！？」

「何でってデリートされそうだったからのと」

スウィフトは片手に持っていた袋を見せた。袋の中は機械の残骸などが入っていた。

「あんたが勝手に持ち出したこれの回収。まったく、回収に来たらこんなどうしようもない形になってたし、リーダーからはデリートされそうだったら助けるって言われてるし最悪だよ」

スウィフトは騒ぐように言うと言つと真剣な表情に変え周波数変換で西杉の近くまで移動した。

「ってことで、撤退するわよ。分かっていると思うけど拒否権はないから」

言い返そうとする西杉とサイレントを無理やり魔方陣の中に入れた。ローブを着た電波体、モウメントスウィフトは照矢のほうを一瞬見るとアドミストのときのように光に包まれ消えた。

空の狩り人（後書き）

アオイと宵磨と比べて遅くなりましたが照矢の初めての戦闘でした。

感想等よろしく願います。

離脱

―特設ステージ―

「今日はみんな来てくれてありがとう。今日を持って引退しようと思います。けど、また戻ってくるのでそれまで待っていてください」

ライブ最後の曲が終わり客の歓声は最高潮に達していた。観客の中には泣いている人もいた。ミソラは観客のみんなに挨拶をすると舞台から降りて行った。

「はあ〜」

「どうしたの？ため息なんか付いて」

今、ミソラは楽屋に戻って休んでいた。スポーツドリンクを少し呑むとミソラはため息を付いた。ハープに理由を聞かれたがうつむいていて答えようとしなかった。そもそも聞こえてないようだった。

「・・・もしかしてスバル君？」

ハープの一言にミソラは顔を上げた。ハープはやっぱりねと言う顔をしていた。

「確かに途中からどこかに行っていたわね。何かあったのかしら？」

ミソラは「何で最後までいてくれなかったんだろう」と呟いてい

た。するとドアがノックされてミソラが返事をする。ルナたちが入ってきていた。外で寝ていたジャックも一緒にいた。どうやらルナたちにたたき起こされたようで顔には晴れた痕があった。

「みんな」

「今日のライブは最高でしたよミソラちゃん」

「うん。聞いてるこっちも楽しくなっちゃった」

「疲れが吹っ飛んだ」

「うおー、本当に引退しちまうのか？まだ歌ってほしいぜ」

キザマロ、アオイ、宵磨、ゴンタの順で言った。ゴンタに関してはまだ泣いていた。そんなゴンタにルナは「いい加減にしなさい」と言いながら叩いた。

みんなは笑っていたがアオイはミソラが少し元気がないことに気づいたようだった。そして、今ごろ気づいたように竜牙が言った。

「そう言えばスバル君に照矢君がいなくなってるね」

竜牙が言つとルナたちは辺りを見回して「そういえばそうだね」などといった。雪島は「夢中になりすぎだろう」と聞こえないように言った。

「確かに何処に行っただろうね」

「スバルは知らねえが照矢なら飲み物を買ってくるとか行っただが」

ツカサが言った後、ジャックがぶつきらばうに言った。

「あいつらミソラちゃんの最後のライブだって言うのに最後までいないなんて許せねえぜ」

「そうですね。せっかくチケットまでもらったのに最後までいないなんてありえせんよね」

ゴンタとキザマロがそう言っていると竜牙と雪島は「ならジャックはどうなんだよ」などつつこみを入れていた。ミソラはみんなのやり取りを落ち着きのないように聞いていた。アオイがミソラに話を振るうとしたときドアがまたノックされると聞き覚えのある声が聞こえた。

「曉だ。ミソラにジャックやみんないるか？入るぞ」

ドアが開くとサテラポリスの服装をした曉がいた。曉は好物のうまい棒をサクサクと音を立てながら食べていた。曉はスバル、照矢以外が揃っていることを確認するとうまい棒を食べるのを止めた。

「みんなこんな遅い時間だがWAXAに来れるか？」

時計を見ると九時になりそうだった。ルナ、キザマロ、ゴンタは行けないらしいが他は行けると答えるとツカサが「何があっただんですか」と聞いた。

「実はな照矢の報告でライブ中にFM星人が現れたらしいんだ。スバルと照矢がなんとかやったみたいだがスウィフトも現れて逃げられたらしい。それで、今後のことを話したいんだが」

「スバル君は？」

暁の話にいち速く反応したのはミソラだった。ライブを途中で出て戻ってこなかったことを考えると大体の想像は付いているらしい。暁は言葉に一瞬詰まったが答えた。

「命に別状はないらしい。ただ、体中の打撲などが酷いらしくて今WAXAにいる」

暁の話を聞くなりミソラは楽屋から出て行った。アオイやツカサたちもそれにつられるように出て行った。暁は仕方ないと言いたげな様子で後を追った。

— WAXA 医務室 —

スバルは目を覚ますとまず白い壁、天井が見えた。スバルはここは何処だろう？何でここにいるのだろうと考えていたが、すぐに思い出したように体を勢いよく起こした。すると、腹の辺りに激痛が起こりとつさに押さえた。隣に座って本を読んでいた照矢が気づいてスバルをベットに寝かせた。

「あ、ダメだよ。打撲や長い間、電波の状況が悪かったせいで体中が痛んでいる見たいなだから、体を起こしたりせずに横になつてない」と

スバルは横になると照矢にお礼を言った。

「それにしても気がついてよかった。ここは、WAXAの医務室。ウォーロックは・・・」

照矢が説明しているといきなりスバルのハンターからウォーロックが出てきた。

「やっと目を覚ましたかスバル」

スバルはウォーロックと簡単に話を終わらせると照屋のほうに顔を向けた。

「そういえば、ライブはどうなったの？あと、翼のある電波体が来たと思うけどサイレントはどうなったの？」

「えっと、一つずつ答えていくよ。まず、翼のある電波体は多分僕ね。サイレンとはスイフトとか言った電波体が来てうまく逃げられちゃったよ。次にライブの方なんだけど無事に終わったらしいよ」

スバルは心配そうな顔つきで聞いていたがライブが無事に終わったことを聞くと安心したようだ。照矢の話が終わるとウォーロックが気になっていたことを照矢に聞いた。

「ところでお前は体とか大丈夫なのか？電波を悪くしたってあいつらが言ってたが。それに、毒も効いてなかったようだが」

「ああ、そのこと。デミスはね周波数じゃなくて周りの電波を感知したり少しだけ操ることが出来るらしいんだ。爆弾は電波で操作する仕組みだったからその回路を調べてもらって何とかしたんだ。で、電波を悪くしていた根元を見つけて破壊したんだ」

照矢はウォーロックの質問にさらさらと答えた。スバルはなんとか理解できたがウォーロックにとっては理解ギリギリのようだった。照矢は気にせず話を進めた。

「毒はステータスガードって言えば分かるかな」

スバルとウォーロックはなるほど頷いていた。

ステータスガードは毒などの状態異常にはなくする能力。つまり、照矢の電波変換した姿、スカイディムネスにはサイレントの毒は効かないと言うことだ。

「まだ話してないことがあるから話を戻すね。それで、スバル君をここに連れて来る間、暁さんに連絡したんだけど、ミソラちゃんたちを連れてくるらしいよ。もうすぐかな」

照矢は壁にあった時計を見ていった。

- ??? -

スバルが目覚めたころいつもの暗い倉庫の中には五体の電波体があった。中ではサイレンとがスウィフトに怒鳴っていた。

「どうしてあんな奴からひかなければならなかったんだ!？」

「勝手にリミスの装置を持ち出して壊したんだから何もいえないでしょ」

スウィフトとは別に興味のなさそうな様子で見ていたウィザード

が言った。声が聞こえたのか矛先はその電波体が変わった。

「うるせえんだよレイド！地球の生活に興味を持って計画に協力してない奴が」

レイドと呼ばれた電波体はサイレントの方を見向きもしないで話を変えた。サイレントの我が儘は、もはや全員から無視されていた。堪忍袋が爆発したようで他の四体の電波体に向かって叫んだ。

「もう我慢できねえ。俺は俺のやり方で地球を侵略してやる。アンドロメダの鍵は今俺たちが持つてるからな」

サイレントはあざ笑うかのように叫ぶと周波数変換でどこに行ったようだ。スウィフトとレイドの二人は揃ってため息を付くとリーダーの方を見た。

「どうするのよフェンリル。あの馬鹿アンドロメダの鍵を持ってどこか行たよ」

リーダー、フェンリルはスウィフトに問題ないと言いたげな様子で言った。

「俺たちの計画に勝手に入ってきたんだ。ほっとけばいいさ。それに、鍵はあいつらに持っていていかれてないしな」

「まあ、そうだしね。リミス、発信機ちゃんとつけてる？」

「気づかれてないはずだよ。それで、次はどうするんですか？鍵の動力、負のエネルギーをためるのに事を起こさないと溜まりませんよ」

「各自それぞれ負のエネルギーを集めるのに行動してくれ」

フェンリルが言うと各自それぞれのパートナーのところに戻った
ようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263w/>

流星のロックマン 連鎖する運命

2011年11月17日19時55分発行